與謝野鉄幹添削附

歌稿

寒梅一枝

明治三十三・四年頃

野菊

弘文

水はぬるし花はま白し藪かげの道は二筋月ほそき夕

馬引いて橋を西への馬子二人語るは戀か夏のよの月

夕暮を野川のほとり去りがたき水長へに秋は淋し

紫のふたつの房をそと摘みておもひたたへぬ秋の夕暮

夕ぐれの雲の行方をしたひゆかばゆかばすゞしき國あこがる人か

十月十九夜

和
1-12
奥原氏 86628
購 寄 研・他 島根女子短大図書館

若き罪うるはしき罪一房のぶだうの色よそほにさめぜれ

ひそやかに摘みしたまひし野葡萄の主の一房に罪ありしか

水の夕おぼしき近く艶なる子重きにたへぬえんじ紫

夕づつの降る夜ひそかにのがれ出てゝ葡萄ぬすむとうたゝねの夢

夜毎しぶだうの房をしたひよるきみ星小し光りうすかりき

月のうたひそかに誦せば彩一つぶだうの影にかくれて消えぬ

妙はなくみ経手にとる若き僧達はひじきぬ日はく似たす

おぼしまに衣の音ほそき萩の夕燭とる人の袖おもげなる

甘んじてうくべきまゝのが暮しの痛手になげむ人わかゝりき

人去にし水の欄干四つ袖もの花白したそがれの秋

海りゆく鳥雲に入るおもひありきめての後のうるはしの夢

信濃にはゝはゝ入る人の友一人迷ひ出しませ痛しげき夜

わき出る泉は林のすそのいはす大古の巌苔乃花さく

吹く風乃西にかはりし桃の夕芙蓉にそゝき雨乃音をきく

雑木林つきたる辺彩雲乃山畑に秋そはの花さく

水口の岸に寄せて田径乃水かなしくに竹乃花ちる

本年十月落採れ

銀杏の一葉

碧雲

名は知らずこぼるゝ木の葉拾ひ上げて
秋の中ふへり歌かきて見る。

戸に立ちて秋の夕を悲ぶとき、
いてふ一片風なきにちる。

うら山のいてふこぼれてもず鳴きて
我うた成らず今日秋くれぬ。

うなだれて何をおもふと問ふなかれ
萩の花ちる里川の水

しぐれ去る野川のほとり去りがてき
水と二人に秋は流るゝ。

水門の扉はくちすうち堀の
水かれ〳〵に蘆の花ちる。

ことほがん言葉も知らず我はたゞ
今日よき日に白菊奉る
（天長節を祝して）

里つゞきさく野の白菊似し人を[illegible]

暮れゆく島蔭に今おもひ偲びきみての後のちる所の夢
しみがれの手つたひめぐり幽せ方の西のみ堂に神うつります
夕やみに野川の石の白きめで、[illegible]あさみの物くる所なき
門に来てしけく雲したふ若き子よ牀のさやぎに再しかすがや
辰乃野を網道遠の夢のかひ白すみ今よ里のさやぎ
庭の戸をひらきおもひし白百合の白き花ひら揺れおちたる
野の末に人のみちたを御しみひそれもや御仏昇き
うすもの夜のほのぎよあて人の忘れまば思ひの影のおもてき
夏花にほのほ会ふ我見よみし[illegible]の遠ひを仰があさ桜か
霧ふる一夜の真ちち母にしれて[illegible]我わがゆりき
此方の雲の[illegible]うた生おべく植衣たびてよ
紫の香りあまり奇しきに[illegible]二十二の春

維に旅にきはみてあらず限りなきあてわは空乃墨らうけき

私をやすに我備ふうたすのみ居きてはのぞみの倚しきの志

鞍の上に夕見かへりの青の色深織ふに此の音の大ゆき

夕しけれ旅人の人の忘れをなし至なきせずやしすけの小笠を

夕月夜馬洗ふ子ら柳かげ野川の水の末遠しうまし

馬引いて橋を西への馬二三人語らは声かおはふ夜の月

水は好るし花は未白し薮かげの道は二筋月は更きゆかへ

只居しの花ちるせどのいささ川さやけき水の夕かげの夜

信濃路にはゝは丈人の夜一人旅ゆきかしままた夜きき近

わき出る泉は洞わずものいずず大木の巌苔の花さく

竹を一つたはる萩乃森の枝うた居はんにあまりたよわき

夜並に為の真ゆぎよる春の音画堂の戸ひらき神おわすよ宮に

夕ぐれを錦川のほとり歩りかたき水長へに秋は流るゝ

紫のぶだうの房をそと摘みしおもれにたへし秋の夕哉

夕ぐれの雲のゆくすゑを眺めゆかば、ゆかば来たるべき国あるらんか

若きつみうるはしき旅一房のぶだうの色よさめはにさめずれ

ひそやかに摘みてたまれし野葡萄人その一房は涙あるべきか

甘んじてうくべきものかうるはしの痛手になやむ人わかくしき

秋の夕おばしま近く艶なる子童きにたへぬさんどおもさきき

夕づのある夜ひそかにのがれ出でゝぶだう畑をとふたゝねの夢

紅色のぶだうの房をしたれよるその星ホしきらうすかりき

月のうたれをかに浦とは影一つぶだうのかげに見かれて情之ね

紗摑くみ鏡をにとる若き信鏡は影さぬ日は人なし

おばしまに妻乃音弾き萩の夕独よる人乃袖おもげなる

見る中に唐尾の山は雲に入りて白にかゝれ夏浮の乎貼

地蔵峠みせて浮かす白波に

地蔵峠陸に白く見えすたれて高らかに我郷の山

夕日かげ緋やくにおちて夕もやの白やにし沈めそその島山

影雲の一條ひけり空のみなそ紅雲の峠をさらん

秋風に袂ふかせて我立てばおもしたゞ涙しき船の上代

一つ一つ星は消えゆく暁方の空に吸はるゝ弓張の月

はかなしとしみじみ思ふ湖畔に一片ちる花人の絵筆

詩集手に恋をさゝやく人二人やさし気よ静かなれよ

恋の詩をうたひ上げて沖に出で波の音に舟の音をする

わが行く人夕の光り浜のうね底に沈みゆくうたかた

雲には水墨描かれて伊吹山夕べ水深し雨の近き頃

古郷の春の夕暮て春はよし雨にかすめる鳴の故宗

古里の島松の緑りの都はるけに雨にかすめる琵琶の湖水

雨細う山は烟れる京の夕桐にともる灯のいとうつくしき

桐にまふ京島原の夕暮の月の中の人なつかしき

雨は降り青く田の傍の橋の上浮かぶ子の肩うつくしき

黄昏の光りさびしき橋の上に

其上の日もあればなほ君待ちし橋の渕の夕かなしみの雨

草とめて御所のあととく来しかみやたちむきかな

縫工が心こめたる一尼に熱や謂ふ衾もおはる

雛僧が席花枝越と春しめに若得しありけりかな

毛上の竹草の陰ぐこもりん
戒に[illegible]の鉄笠山の[illegible]
雨の夕くれ

春ノはじめ君とはいへし人の上をきくゆふぐれの日の[illegible]

草とめて君語りもありゆく仙洞御所の雨の夕くれ

おもしろき四條の橋にうかれ来る

古都の海浜坂の寺にほゝえみ又之て一き流し北坂の遠山

茶工らが筆を一字して描きの畑の中道月に舞ふ

夏畑のつきおそゝとゞ紫に影なす松坊の遠山

浪寺の松の緑[illegible]夕尾が来る古都の[illegible]

夕雨降し[illegible]の伝生

赤裳つけ芝生の上にむらがりて遊ぶ子らあまたの住吉の浜

住吉の森の古松神さびて並む世の古き昔偲ばゆ

月照らし高砂の沖の夕なみに潮あはれなる松風の音

砂白く松緑なるは浜寺の

雨雲は六甲山を覆ひかくして淡路しま山夕立のあと

淡路の長堤に似たる浜松のつづくあたりや淡廣の湖かも

1 朝もやの中より現はれし青々と浮き生駒かつらき

2 天王寺古方土町を朝五つ頃五重の塔に月を眺むる

3 東に迫る金剛山並右に見て

4 窓によりて夏山ながむ大台ヶ紫樺眺めつつ

5 紫苑へて行小橋の人は人も見頃の色み南の花木

6 当麻寺一面越しにしばし峻念寺の旅路しも見たく

山道に田り西縣[redacted]の翔け旅くよろしき　高木和跡

峭壁の牽車に曝えて　撫子桜の花はれ中に塔の夏中

うつせのあゆ水をここに減し　おきて古来田中はイの歌人たち

赤麻寺は ここ上守りけもて二子山をさ見つつ　上寺了泉田

何ぞ深く 僕なきかけは　諏訪大山　神代作らの柱尾のみ

まき向ぐまきの宮の跡やそつこ山は深くに

夕日かけあかたたに あかてうたくと雲に影なす流版しま山

青山のもりかげ住す杉まほらなす大和日本 雅の昔しも

○亜弄
十月廿七日
投

くりかへの[illegible]こえて[illegible]山路や孫子の手とに[illegible]けり
知り[illegible]山[illegible]りくれて[illegible]けり
[illegible]はは[illegible]ぞ[illegible]

白菊の花にかくれて

松風（第六十三）

碧雲

朝もやのかやのうちよりあらはれて葛城生駒かつら城。
窓によりて亘山うつす土古手が紫はかま[illegible]ならずや。
雲に迫る金剛山を右に見て夏の朝旅
山藍に田の面緑りの園の鞘[illegible]旅によろしき奈良の大和路。
当麻寺はここと聞けども二子山それと見つつもすぎし我かも。

雌雄の峯雲に聳えて蒼なる松の木ぬれゆあららぎの見ゆ。

何となく襟正されぬ畝火山神代ながらの松風の聲

三千年の昔おぼえて橿原や畝火の山の松風の聲

うちなびく稲葉の末に時ちて松緑なる天の香久山

大前にぬかづき居れば何となく涙こぼれぬ橿原の宮

青山を伏せ垣まほらなる大和は国烟立ち立つ。

車窓や畝火葛城山夜ふかきつれづれしよ香具耳成山 [illegible]

あの方松のちちの [illegible] 三輪の耳成山

新緑

碧雲

しまからは何か [illegible] き語、それよ心のままに織りなしこそ見せん

松風を千年の友とをとめの [illegible] すがすがしく [illegible] 人かも

庭の丈生のけせて見たき姫小松風樹の [illegible] 池の [illegible]

ほのぼのと [illegible] 清えてしらみ [illegible] 光の [illegible] に [illegible]

銀英の声せ相識をぬきかけ [illegible] いかにとと見つ [illegible]

白英の味はとは [illegible] 妹がまぶりのさて [illegible] の [illegible]

[illegible] に [illegible] 同しくは柳の [illegible] にぬれて [illegible]

更くるまでうたにかけりし [illegible] も [illegible] の [illegible]

自ら [illegible] 心松の中 [illegible]

[illegible] は松なし [illegible] 花しる [illegible] の [illegible]

ほとゝとは深の柳あけぼのし京の春の庭におきて浮き

細き絵がさは物がけに消残する四の陰ふたゝびさき夜寺の刊

いたちのおとつまさきを見かへしさみだれかれてすみれ花さく

やと春を里川つみしたる来て渓く花にはつけて見き

おもかげが行かけのきり花 月白かりきほのかりき

見つ寺に英金見金紅の夕の雲を見のうちしき

迷ふ流の子がたにきかきし春雨きて梅さくゆふべ

はつれたる我人のおもかげもあけず小指数多のおもてやせたる

結ひたれば島田におもし祗園の門出ではなくはつかしの夕

さればとて傘もにおもて若かき関越ゆく祗園の舞

我しなす別さきげし前なくる銀燭の夫のあまりまはゆき

京の人におくる迷ふ紅葉かるる東山の秋

乳房をはさ神秘はし中のさめて夜の神のみ手あたりふりしき

われたる紫の衣つ水を肉下まず枕をいまがかる若さし大

さらばとては〔墨消〕小さき人のこゝしろかけあまりころはしあまりわれ

椿しられしる雨まちてきこえはせず此の日暮かな

明月今宵はすなわち泣かけ

あえかなるが紅の玉の都路のものはつきのすがたあきれ

春きたすき日の手枝燕知の来つちまちまの小さき

逆身に花片つけてうちのせていさゝ小川にたまおくれば

よき川さらを水に涼しき花は春の家へと涼しきあへ見

二の若乃すしの袖をつかれきてすな夢の中かしいかわれ

そゞろ里の小川の中おそれてうはしるその色白かりき

おもたかの花さく見えて春山の夫さぶしされに飛ぶ山家

若き年殊に白たへて咲き乱る中梅さく

白梅の花の中さに方あせて寄りそひきにまやみおる秋

しめやかに春の雨ふりて外も白くなりて人は住まず

妹なく山吹相添ふ子が詠しおえてこれ若て

傳きくしへと天の上へと立は男女なり年月十七若草き

山伏の花すみかとも見てまつの心の嬉しさりぬ

星川の流たゆまず四つ郷しへはけや帰しま女の御なり

松草の花のたぐひ見るがに花の色は若草のき

志こらて見る年にまず寄る事ぞ新河くとぞ

我恋

つとめて今日帰りゆく人へ何よりも朝のたより待たれぬ日をなかき

日毎く東の空に何ものと母はたとしぬ妹は帰り忘れぬ

まちて十日帰くらしたる甚りのゆくへと眺め出しぬ

文出して待つ五日六日たへいかにすらん雑誌の家にと届けてやりぬ

一昨日（かとつひ）の中ふへ届けりとかへし待てる夜存られす考え先あらん

まちくし皇后崩御よ今日十二月二日午後三時四十分

夕けたに毎に呼はれて我しらぬ朱筆もち出て人に突付けなん

声もへて待たれ者せみわきまて我も人なり人も人なり　某村

號砲の音に停止ときゝて

したしみの乳ありきと今更に何おかしく思ふきみのこゝろ

はらに尾とまりて残る小石と砕けてしぬる悲しさ

おのかしくおのが言はにおのがるたまを何がおもひかなる心き

我とまか滝なうけしさやかさを止むる力人もたのめやも

八百萬神にあれまし御光る光うに添ふる影しるへとは

ねたみおはきみきの風にたへかねてちりし花笠何いたましき

このむりうたの秋に風立ちぬ花はちるとも何うらむへき

以上 十二月十四日 深堀 三郎

とき霞に梅が香ふかき二月の　里の山かくれ　雨になりゆく

中ぶやみに白の白き香をしたひよる梅の二月　堂のおぼしき

白梅になく子真夜の夢に見て

雨空しそゝぎたる中ぶまぎれ渋の葉陰に白梅の咲く

試掬して桃の雨見つ夕暮におもむきにたへぬ

何日経ず駒がつき窓に入りし桃の花一昼雨静なり

夜は更けれ凡障子すべし夜のさびき話微酔かくる酎はやらず

祖初のなくしおやかに春の夜を梅のかをる月おぼろなり

燈は暗し首縫うの色更けにけり若紙の灯あかり雨静かなり

浦沙の空しのぶ月に梅の花のつぼみあかく夜はふくれゆく

中空の陽春の形微笑にけりしおはさき

鶯の声しづまりぜかて旅いせに

はねつるべきしる音して春雨のかすみの中は朝ぞさし昇る

一本の梅はみちなかる絵にのぞみたにはしる梅の花さく

桃梅ちる林中かしみ伴わん様の松ゆかりえいなくして

ここ今宵のゆけ海の人あまたの月となくる舞

三弦琴の陰れのうたは旅日りたる天女の尖れ犬かやは古松

昔のごとき小川おとなしてかれ合の石を下にしの白梅の花

前栽の梅ほのかま青やみ蕾の声やわら人のはなかり

旅ゆく人をたづねて六十マイルの郷のつくま手玉の宿かる

且おもうなし件は

家は主し梅はさ白し千年の大和国封なかりせば

若葉の時代のめぐみに丸本の庵の梅何かさくらん

丸善製

み経手に人りはまうたがみは旅に述ことならずわれ

ちかくよそみ経にすかる宵の夢見し左師の眉白かし

おもひ出る老れうちはし乃一時を悲ふにさき夕く秋の鐘

僧わかしつく手たゆげの秋の紅枝さくに比せさーし我旅の日記

似たる比丘ありしは憐かて夕暮の羅漢の像に黙くれんとす

日記くりて旅の跡を追ふ秋たらず猿の夕暮雨を伴ふなる

夕雲に追ねぎすてし旅の我標にをあんの名にしきおもひ

杜の南列竹林乃葉の色似たりと見しに水の色あをき

山に入りし三年杉葉の衣の袖照りしあきにさして迷あり

うら夜て扨かん真千鳥ちりすみたゆたひに極りけ空を経大の影

橋を北一柳一本水によりそめなみより方にしあるらし

ゆふやみ

ヘリオトー

陽雲生

夕暮を野川乃ほとり去りかてき水長へた秋はながるゝ

むらさき乃葡萄の房をそとつみておもひにたへ一つ夕まくれかな

夕ぐれの雲の行方をしたひゆかばゆかばすゞしき国あるらんか

ひそやかに摘みてたまひし野葡萄の一房に罪あるべきか

星一つある夜ひそかにつかれ来てぶだう盗もとうたい秋の夢

夜毎しぶだうの房をしたひよろこびの星かし光りうすかりき

月のうたひそかに誦せば影一つおだうのかげにかくれて消えね

おばしまに琴の音細き萩の夕燭とる人の袖おもげなる

水はぬるし花はま白しやぶかげの道はふたすぢ月ほそき夕

馬引いて橋わたしの馬子二人かたるは戀（こひ）かおぼろ夜の月

夕月夜馬洗ふ子が柳かげ野川の水の末とほしろき

口（くち）なしの花ちるせどのいさゝ川きゝやすき水の音かな

夏花にほの白き香を我見たし見出たりの迷ひそれかあらぬか

野の香　しののめ會

翠雲

○

かゞやける星の光りにすかし見つ野の花白きたそかれの道

○

馬子又稲草の末にかげきえてかすかになりぬ野うたの聲

○

二の夏を若き詩人いにしへ草刈る女うたのさびしき

仙

香雨

○

田草とる空は動かずうち渡す青田の末に雲の峯立つ

さゝ波に盥うかへて蜆とる小笠かすめてかはせみの飛ぶ

○

てぃたんに孫と二人の涼み臺青葉夕風袖にしめつゝ

誰が袖

○

朝戸あけておくれ毛撫づるめめ乃地池の朝顔(はちす)のおと聞くる

紫雲

○

年迎ひて野守二十の香去りぬこの夏百合にうたをあへし

○

戀の講をうたに求めたる野の朝夫のをゝ琴の音を高かりき

杜鵑十誦

○ 碧雲

夜は更けぬ雨はふりきぬ我妹子と桑つけ居ればなく時鳥

○ 自適

背の果の晴衣かれにと雨の夜を蚕かひ居ればなくほとゝぎす

○ 尾来

もののけの詠にふけて帰るさの松原つゞきなく時鳥

○ 香雨

由縁ありて少女くびれし橋ぎはの一本松になくほとゝぎす

○ 梧北

朝雨のやゝ晴れ行くむかつをの青葉かくれになく時鳥

香雨

かへり見る城は若葉にとざされて落ち行く月になく時鳥

誰が袖

○

そぞろわれ友を送りて戸に立てば月をかすめてなく時鳥

誰が袖

○

京をいでて今宵ききたりほととぎす青ばたゝもろ奈良の古里

桂北

○

たどり行く松原つづき雨晴て夕べの月になくほととぎす

○

しのゝめ会出詠

香雨

すごろくのさいを重ねて春の夜を局の庭に春の雨ふる

松の枝を梅を桜を渡りわたる目白つがひに春の雨ふる

嫁の日の良人宮にちかゝる振袖青あらく夜はいたちゆく

ぬかづくは雁まかせて姫宮の祇園をよぎる春の夜の月

ふさはしと、母のたまひし其時よ幼なからさの吾怨みは室

銀燭の光もまばゆき舞殿のおばしま近く散るさくら花

それに似る桜月夜をほくかげて昔の春の歌誦も出でぬ

方丈は囲碁のまどゐに夜ふけて桜の庭に春の雨ふる

霞こめて宗道の瀬にはもあさ行くはるかの旅の出雲路

春わかし岡ひのいらへたゆたへる菫咲く野のたそがれの人

散る花に世の寂滅をつきかねつ陸橋を下る僧眉重き

それ故にあらずとのみの人若し それよ海棠雨や、重き

のぞみ若し 行くはるかの東路や青山百里春の風吹く

春の夜を沈の香たかき春闇窟に道説く僧の眉長いかな

わかれてゆ三とせをさくに春四月さくら散らし水蕩ゆらく

兎も角も我とげんの我もて サタンの征矢にわれ死なんかな

自評云 陳（全体）

和歌

（緑意紅情原稿）

新年海

（出雲国八束郡秋鹿村 奥原潔）

東の海原とほく明けそめて
浪より匂ふ初日影かな

しののめ生

撞く鐘も出かん古寺残りけり

[illegible]

春乃夜　新作物

の筆乃のあと乃許へ

一月三日[illegible]

（奥村版）

琴乃舎課題

しの丶先生

春雨

夜は更けぬ几帳をすべる衣乃さやぎ
弘徽殿あたり春乃雨ふる　野菊

しめやかに春の雨ふる夕暮を
白桃ちりて人はかへらず

いたつける人をたつねてかへるさの
柳のつゆ春雨のふる

柳の月

おくり出ていしはし停まつ門の庭の
柳葉もるゝ新月のかけ

青柳の絲くりかへしくりかへし
あや織りなせる新月のかけ

紫紅社詠草

小村香雨

○小萩ちる宿の夕を戸に立ちて衣か浦に雨の萩見る
（[illegible]）

○知多出て漁舟にけふ大船の帆柱高く立ちならふ

○富士消えて天城にたゝる雲低し白帆のわつかに海をゆきてゆく

○そゞろなく人を見おくる夕月夜大空ふく庭萩する

神田芳雲

○雨の夜を秋の芳野のさゝやきに小さき佩刀手にとりて見し

秋もなほ世にうらぶれて我子ありときゝます亡母の嘆やいかに

〇　一具体　紫雲

〇　浩々と江東みだ仰ちら山々もずの音高く雨になりゆく

〇　並一つ水にさゝやぐ野の夕暮の春帰りし人も

月山懐古

落日低く雲おちて秋はくれゆく月山の
断礎荒垣徒らに　游子断腸の想あり
時は遷りぬ人逝きぬ暦は廻る三百年
英魂空しく眠りては　十州の覇図今如何に
経営惨憺　経久が覇業の跡は草にして
亭々たる古松風に吼え老檜夜なく雨に泣く
巨人に似たる京羅木山銀蛇もこよふ富田川や
千軍万馬叫喚の　響ぞいまも古戦場

ああ哀れたゞ一孤城　外援絶えぬ糧つきぬ
地は利あらず天は與せず　重囲七年命なる哉
言ふこと勿れハンニバル　説くこと勿れ張子房
洋の東西時の古今　成業跡かれ何物ぞ
心を尽す幸盛が　流浪艱難　幾星霜
妙美胸にあふるれど　神兼天に適ずれど
時は許さず騅逝かず　大小六十有五戦
功業空しく沈むとも　恨は微かし甲野川

水谷毅次郎

壹番

夕顔

垣石見ぬ厭ふか残のたけかきたをもき縁なる夕顔の花

蚊やりたく残の垣根に時の見えて天まひ[illegible]花の夕顔

弐番

夕立

箱根路は夕立すらし天そゝる不二の高嶺は空に成けり

夕立の名残の香をぞ知られけり前園の津田のまつはら

三番

夏草

夏草は[illegible]にたのひて[illegible]

心はてたゝの声に夏草[illegible]問ふ人もなき[illegible]

四番

納涼

水の上を流れて来る人も風涼し川ぞへの[illegible]

おなしくは舟よりも流れを袖につゝみて家づとにせん

五番

美人

乙女子がかざす扇の池水に写りてさへにはなはだ[illegible]

青蓮

ありがたき[illegible]蓮の[illegible]はむかしの乙女[illegible]

六番

初秋

何となく衣手さえて夜の[illegible]秋の初風[illegible]

夕立の名残を掃ふ小手神の[illegible]秋の来[illegible]

七番

大方の月にはあれど古寺は[illegible]

古寺月

ありけるはすむ人もなき古寺の法のともし火月や照らさん

八番

古攝秋色

[illegible]大攝の松に[illegible]夕[illegible]秋[illegible]

吹きおろし吹きまよふ秋の夕ぐれに [illegible] 大博の [illegible]

九番

深林夕雨

[illegible] 衣 [illegible] 笛の [illegible]

霄のまは [illegible] 笛のねの [illegible]

十番

不二山

千早振神代のままの不二の根は実にこそ国の鎮なりけり

世にたかき [illegible] 不二の大なけ

尋常一年作文

忠孝　1

雀はチューチュー忠義者
鳥さへつくす忠の道
烏はカーカー孝行者
鳥さへつくす孝の道

よく遊べ　2

遊べあそべ仲よく遊べ
正しくたけく
学べまなべつとめて学べ
たゆまず倦まず

お雛さま　3

棚にかざったお雛さま
行儀がよくておとなしく
無理もいはずに泣きもせず
ほんにやさしいお雛さま。

尋常科二年生程度

○○友どち

手に手をとりて学校かよひ
雨のふる日も風の日も
いつも仲よく助けあひ
誠をつくすぞ友の道。

○○○早苗取

菅の小笠を傾けて
今日も朝から母（かあ）さんは
前の門田へ早苗とり。

○

雨のふる日も風の日も
われらは学校休まずに
智恵のたねをば蒔きつゝし。

○○かめと兎

あゆみはおそき亀さへも
遂に兎をおいこしぬ
たゆまず進め小供らよ
油断は汝のかたきなり。

かせげ働け

昭和三十五年作

春の遊び　13

日はうららかに風ぬるし
のべに山べにうちつれて
いでや遊ばん男らしく。

○

すみれたんぽぽ蓮華草
さきの野のあやにしき
胡蝶おひつつ遊はれつつ。

○

桜ちりゆく下かげに
もゆる早蕨ふみしだき
いでや遊ばん睦しく。

○兄弟

兄はおとうといつくしみ
弟はあにを敬ひて
うれしつらきも共々に
たすけあふこそ人の道。

心

人の心は水なれや
盛れる器のさまざまに
幼ごころは[illegible]なれや

立つ森の其の如くに。

紙鳶 14

吹けよ春風ふけふけ
こたつやぐらの籠居は
日本男児の業ならず。
○
吹けよ春風ふけふけ
昨日買つたるやつこだこ
うなりをつけて絲つけて。
○
上れよあがれ天までも
つけしうなりの鳴るかぎり
天つ日かげを背におひて。
○
上れよあがれ天までも
まきたる絲のあるかぎり
かの青雲をおしわけて。

尋常四学年程度

梅菊 4

よろづの花にさきだちて
雪に匂へる白梅の
あなかぐはしきその香り
○
よろづの花におくれつつ
霜に匂へる白菊の
あな美はしきその操

目にさへ見えぬ塵埃も 12
積れは遂に山をなし
軒端をめぐる雨だれも
木には石を穿つなり。
○
わづかの暇も怠らず
うきもつらきも忍びつつ
つとめ学びて励みなば
如何なる業か成らざらん。

○○○ボートレース

漕げよこげこげ力の限り
我等は日本男児なり

海国男児の旅立ちを
ためさん時ぞ今日なるぞ。

○

吹けよ吹け吹け波よ立て
我等は日本男児なり
海国男児のほまれなれば
ためさんは今日なるぞ。

○

はや近きぬ決勝点
艇よ静けよ櫂打れよ
大地に震ふ国の響
我等は揚るチャンピオン。

不二山

峯は雪白に輝きて
雲を流がる不二が根の
高く尊き姿こそ
我が日の本の姿なれ

○

夕日の空にあるは尚て
雲に聳ゆる不二が根の
清くさやけき心こそ
我が国民の心なれ。

さざえ

鯛や鰈がこちらあちら
とりどり集ふ海の底
からを見なたら大さざえ
さも得意げにいへるよし。

○

鯵に追はれてうろたへて
昨日のざまは何事ぞ
常にかくれがつくりおく
我等がさまを見なよへと
忽ちぱちり音のして
鯛も鰈もたげ逃ふ
さざえは騒がず殻の中
蓋をしめつつ潜みつつ。

○

まもなくそっと蓋あけて
よくよく見ればこはいかに
身は魚だなのざるの中
はや売物となりにけり。

運動会 (綱引)

廣いお庭のまん中に

赤と白との帽子かぶり
揃へしもおた様白襷
力選んで腕まくり。

○

今日こそはれの運動會
互にせせと勢を越して
ひけよひけひけ力の限り
新たなつなのきれるまで。

○

ナレヤレ様女の白帽よ
カレソレ平家の赤帽上
足をみ揃へて力をそろへ

ヱーヤ ひけひけ ヱーヱーヱー。
敵の足並みだれたり
ストヤまのどもこのひまに
勇ちひびく拍手の
天地に震ふ凱歌の聲。

修身唱歌

農夫（和合） 15

夕月かすむ柳かげ
庭に牛を先だてて
帰りかへる親子の
声ききつけて走り寄る
兒等は門辺に喜ばしげに。

○

鞍をおろして足あらひ
いろりのあたりへつどひきて
妻が手うちの日本酒

麦のご飯にさつまいも
げに膝下の團欒かな。

香切達（博愛） 16

むかし音のものがたり
爺とばばとすまひけり
ある時爺は山へゆき
あとに婆は衣あらふ。

○

ちぢが二羽の小雀は
ひまを雑木林なめ如

ははは怒って　剪刀(はさみ)もて
舌をば切って　放ちけり。

○

おぢぢは帰って　これを聞き
あはれ涙に　むせびつつ
舌切雀　どこどこと
山また山を　たずねゆく。

○

トントン、キン、トンキンキン、
はた織り居たる　小雀は
藪の中より　出でむかへ
うれし涙の　ほろほろと。

爺の膝へ　とびおりて
二たびミたび　おじぎして
やがて奥より　出しきて
つづらを一つ　わたしけり。

○

山坂こえて　谷こえて
ヨッショヨッショと　家の門
いぶかるばばに　目もくれず
つづら開けば　これはいかに。

○

金銀さんご　あやにしき
見るもまばゆき　寶もの
爺(ぢぢい)はひとり　ほほゑみて
うれし涙に　かきくれぬ。

○

情けをしらぬ　ねぢけばば
この有様を　うらやみて
舌切雀　どこどこと
またも山路に　わけ入りぬ。

○

トントン、キンキン、トンキンキン、
はた織り居たる　小雀は、
やぶの中より　出でむかへ
つづらを一つ　渡しけり。

○

山坂こえて　谷こえて
やがてつきたる　家の門
ヤレうれしやと　うちおろし
葛籠ひらけば　これはいかに。

○

蜂やむかでや　長物(ながむし)や
見るさへこわき　ものばかり
ばばはあきれて　うち伏して
あはれその場に　絶え入りぬ。

一束の矢（友情）

病のとこに元就は
子弟を集めて征矢とりて
ゆひて束ねていへるよし
誰かこの矢を折るものぞ。

○

父の命は目のあたり
我こそ折りてためさんと
悴み腕はあだなれや
矢竹心のますらをが

○

さらばとばかり元就は
自らたばをとりはなし
一筋づつを与ふれば
忽ち折りぬおのがじし。

○

心協せて寄りなば
いかなる敵かおそるべき
家はさながら磐石の
その礎ぞゆるぎなき」

○

束ぬるものは折れがたし
離るるものは折れ易し
ゆめな忘れそこの教訓
ゆめな忘れそ同胞よ。

蟻と蟬（勤勉）　11

秋風そよぐ夕まぐれ
一群の蟬はよろよろと
蟻の住家にたずねきて
わづかの食を求めけり。

○

蟻はそぞろにあはれがり
心をこめてとなげらく
衣はうすく身はやせて
その有様は何事ぞ。

○

何をつつまん我こそは
楽しく長き夏の日を
なすこともなく歌ひつつ
唯いたづらに過ししと。

○

蟻はほほと嘆きあて
我等はからだ小けれど
汗を流してあつめたる
冬の準備ははやなりぬ。

○

勤むるものに報あり

はたらくものに命あり
遊び忘るなまけもの
それを林ずに惜しまれど。
○
見るに見かねて恵みたる
僕の命をいただきて
羽もよろよろ帰りゆく
蜂の姿があはれなる。

時計（動態） 21

砂をもとかす夏の日も
霜さえわたる冬の夜も
たゆまず倦まず働ける
柱時計を君見よや。
○
みんなの心の隔なく
時をたがへず休みなく
我等導く時計こそ
学びの庭の恩師なれ。

農工商業のうた

一、瑞穂国と名におへる
我が日の本はおしなべて
気候よく地味肥えて
豊かに実る米に麦
米は肥後米ノ保庄米
長野群馬に福島は
共に名高き養蚕地
宇治は茶[illegible]伊勢駿河
[illegible]茶に茶は
[illegible]当苗
[illegible]業を
[illegible]と。
[illegible]に
[illegible]よく

掘れどもつきぬ石炭の
無尽蔵なるこの国の
製造輸出の品々は
絹織物に木綿織
京西陣や福井縣
桐生足利手足武蔵
久留米かすりに阿波縞
瀬戸の陶器に金博堂
つとめ営む工業を
手先に妹なる国民よ
○
二、四方海なる日本国

日本國歌

り

國の

し

り

米國に

得意先

の本懐は

[illegible]行たてとして

音に義高を承ちて

廟のうちの商業を

四方拂ち國民よ

船長は進んで松本氏　怒ち驕る雲のいろ

船員は進んで血にもゆる　右に左にとれちりて

商船校の健児一百　傳騎の侍の[illegible]く[illegible]

舞台はいつこ大東洋　只困惑の大魔界

野島が岬をあとにして　南は遠く襲い来る

相模の洋を乙ゆけは　壮か千筆の[illegible]はの子

伊豆の大島に日はおちて　慶喜の叫ぶ息の下

汝が馬蹄の陣揮の音

銀山くづれ飛びちりて
梅若契りわたくけは
雨師風伯は才指し
村を浮影にあわすさぶ
天地に震ふ咋鳴は
森を傷る　か
梅子鐵えし　海の子か

カためき人　附生手　記

○萃

寫眞旅行

第一日

曉風残月を吹いて、白露こまやかに、草深き野路をたどりゆけば、一帯の稲田蒼波をみなぎらして、清涼いはんかたなし。行くこと数百歩、銘像に謁しますものあり。驚きて熟視すれば村翁葉。この頃の炎天に稲田[illegible]の乾枯を救はんとて、けなげにも一夜を徹漑に眠りしたるもの、蒙をしと杖の長烟管、傍に数匹の犬のあるを僅かに認めり。

布川氏と[illegible]に會し、湖畔に沿うて行く。風静く秋し、遠雲連低く空を壓して、景色たへがたし。七時ばかり松江に着し、写真器械その他の準備をなし、十時半ら舟の汽船にて、美保関に向ふ。

○基隆神社

午後一時半基隆につく。福田氏方に投宿、休憩の後、基隆神社に参拝す。右の鳥居を入れば、神嶋綱をなして、庭上に下り拝殿に詣り、神楽の響割愧として、覚えず荘厳の感にうたれたり。境内を一周してから、公村十分校に至り、実業補習学校生徒の製作品を見学、公校は本年四月の開校にかかり僅々数月の間にかくの如き進歩を見るに至りしは職員諸氏の努力に負ふ所なり。

○燈台

午後四時公校を辞して、草勝たる山腹の小径を辿り行くこと七八町にして海水浴場に達す。漁舎を右にし、浴場も荒廃にて浴客少しもなきを見る。右に行くこと十数町にして燈臺に達す。燈臺は島根半島の北端地藏崎の岬突端に在りて規模甚だ宏壮なり。係員中寺氏を訪ねて、内部を観覧することを得、係員の許諾を得て内部より撮影す。

裸を擁して涼気膚に徹す。出雲不二は近く眼前に聳え、半腹に白雲を帯ぶ。船上山はその横に起りて、巨人が虚見を擁したるが如く、湾内の白帆は鴎の如し。北方は遠く去る白帆海上に水天髣髴際涯を見す。

○撮影

五時二十分海水浴場を撮影す。先程より十分にして結果よからず。六時五十分神社に至り、境内北西側の風景を得て撮影す。港の西に至れば、東岸合歓樹低く海を抱きて、碇泊せる幾艘の帆前船、浪を蹴て出づる諸舟の純美なるを撮影して宿に帰る。

○浴場の夕景

浴を了へて帰れば、水夫は裸体のまま海中に在りて浴を楽し、小児は岸辺に遊び、大女は大布を腰部にまとひ

〇[illegible]の夜景

小樽を抜して港湾の鮮ぎをあらず、出雲不二は夕映の名残
の光を番頭に止めて[illegible]の流れあざやかに、やがて暮色靄
籠として夜の幕に包まんとす
水に浮かべる橋には白衣の人、半裸体の人、橋にもたれ涼を取り後
山のひぐらしの声と共に[illegible]堤は一面隠墨の彩色をなす
空林したるが如く涼く蒸く暮靄の裡に入る
夕暮の喧囂は暗に消えて、独り黒く山黒く水黒く、旋回
船の漁火の丹は漆中に漢火の如く星の如く瞬やし揺け
るの中海風涼なに面をかすめて寄る波の音[illegible]
やがて両岸の水樹絃歌の声おこり天華[illegible]相和して
一天の五華燈一千燭の白木、あとは夜を彩る物語

夏はよい哉、朝は未だ暑くて大山颪が冷やしと
主人[illegible]の新調鉄の椅子の端を少し離して
方錦ははるか下から下に松原なからなる
花の松原、此所の汀画の如く磯辺松樹の花
織糸玉線をあやつりて漁夫の竹藤を競争する漁女の手振
たゆたゆとかかす　湖上の[illegible]
れば此の月東山の上に出でて金波漾は金堤をなす往復の船
船漁岸の人家墨絵の如し
水の様月にあやなす織りなす浪の一枚夜は更けにけり
姿浮の大海
墨絵なす横山松のいただきに月は上がりて行く
平けさけし

うねうねと鉄舵もこちふ懐のうへをかすかに揺る
追分の節
種枝のスーツ人を去ーなおす寝につく

オッカヘハッタデーゴーズンセウナ、
今日もヨイ天氣ナゴザイマス、
夢の如く、まぼろしの如く、眠れる如く、醒めたる如く、ソと
目をさませば、朝暾松樹を色づけ、大山は夜の帳をかゝげ
て清く霊氣をあふらげり
沖合に碇泊の隠岐丸は汽笛を鳴らして頻りに出帆を

報告し楼上の客は皆望朝餐をすへ語らふにおくらすまじ名
船にうつりし松江直通の小汽船は煤烟をはきて出帆の
準備に忙はし
やがて汽車の音後山にひゞきて今日の世並を縁起一声を開
く音こゝかしこに聞ゆ、岸辺に船かつぎて朝りを挿む人
海水に飛びこみて泳ぐ人、エイヤエイ、エイヤエイ、ギコー
ギコーと手ヨーをあやつり木の葉の如き新造の船ずらりと飄を吹
へたる女、櫛刷れる鮮魚を投げ出す漁夫、ぞ出気信
ここ境港の朝けしき何となく快活なり
午前六時右を発し望続りの電信柱に沿ひ崎地を後
坂を登りて行くこと十数町、美保関の背面佐井浦に達し
舟を備ひて雲津の岸壁を見んと発す

松島は五千許りの前海上にまづ静穏なり　東方島嶼の勝
の絶景には望楼高く聳えたり
従来は各岸島の背面に至り戸数僅かに十数之海岸には僅か十数
の物を有する也し　東方島嶼景勝の此数々には望楼多く聳え地
蔵年の煙量と南北相對す　其下一里を海つと称し松浦に
五千許の前多船の寄港人を集せて　然り海上静穏にして
風情起きす　津風衣を掛ぶ連波　松陸を遠し　快古へ一船より
す海岸に断崖峭立して　海風荒つ白帆あらく海中には巨
巌怪礁峙立して　青松翠葉に並し風光の清絶なる多く
其の北を見す　黒島の巨礁を右に見て　青島に到る　対岸
は絶壁数十丈　中比沖大岩　杉樹其の岩に點綴す　岩岸
赤壁の岩を擅にす　中央に洞穴あり　船と其の中に入るべ可能なり

船楫を打てば　反響雷の如し　岩窟の水際は幾千年の潮
に洗はれて紫色を帯び瑯玕の如くなるもの頗る着すきも
奇なるもの多く　たに於て濃風襲ひ来りて波摩巣立す　即ち
船をかへして雲津湾汀に向ふ　湾汀の巨岩峭壁のたたす
ま高赤壁に勝る　この絶景をして　奔直湾別の紀にあらしめ
は雅客の賞讃を博すること　蓋し少なからず　湖畔の漁濱、沢原
吐露の汀渚　白砂青松漣波漱濯　是は即ち是なるといへり
都人士の漁猟を一とし　来たりしかし　鄰濱は寂然
はある優暑にかゝらんも　啻にかの蓋門の北海岸の如く珍厳
峭立巌窟を有し　長風万里巨濤岩を嚙んで　之と称
けずも厳ろへさあるべく丈夫の精神に至りて　千軍万馬を
叱咤するの如き壮志にして　壮絶の大景に至りては　昔日の景

海岸の特徴にして太平洋に於て見られぬ特殊
この地方の海岸に於ける出雲地方の大山下に於ける入り込みことを
證明するもの久保田氏は此の名山水を説明して曰く山陰の
海岸美を代表するの特色は主に雲にあり、島根半島の北方海岸
八束、加賀浦、美保関に至るの間 特産絶壁岬湾断崖屈曲
之に加ふるに嶮しく斧を以て削りたる如く（たれし）と言ふ
八千年古の海岸に洗はれて不撓不屈の偉大な美観をなすの
地方は宍道湖の北七類湾口の島を以て島根半島
島の北端に於ける大絶景と称すべし
八雲村より美保関に到る大山の麓 諸浦に向ふ 宍道湖より
海に面して経済は白波につく北岸第二の嶮峻なる一座の島
遠山の麓を巡り諸浦をめぐり蜿蜒屈曲して荊棘の中に消え

あり大山背面を真似して流行の如く一歩一嶋断々絶
壁に上りて海を大小無数の岩を下れば即ち諸水流れ溝水拡
十石の洋に排列し、寺の下の流水に嶋を聲して夜寂寞
岩壁を上り僧田に下りて上道に七類湾口の絶景を望む
島　島浦を離れ岩上の松老に激す白波白帆の遠
く往へつ住一幅の山水画なり僧田を過ぎて七類に至る道上
島海岸壁を上り下りゆく奇岩ますます加はり風景いよいよ
美しく一個の蓋様に崎を渡き帝しして七類に見る
新夜景眼下を訪へば秋休養に遊ぶ西人蘇生の抑も此を
なす 實に集中休息して
今年の心つくしを振るて譚すつ生活の全てを楽して作は
に向ふ窟道を急峻陸路流行背負うて行す 山路
無必服を付て此事すべく

立ち草葉をひらきて（江中に一島あり古木森々たり此の如き水なり）一上一下漸くにして此処に達す。渡子数
百舟を浮ぶるに至る。其上流の諸所をわたりて落潮（の海）に出る。少しく
夕陽海に傾きて沙汀湖を照らして其前の本島は夕陽
を浴び、第十の浜舟々に在帆に出帆せんとして漁村の夕
暮の景色すこぶる少からず。所々樵歌す。是より樵歌すれば其
隣の烟景、實に偉観、之を観ては貴御の夕陽を[illegible]
[illegible]
此景を中に存して半途に入り、[illegible]群上の花を
多く見き存す。稲株を残して北風につく。夕陽全く沈み
て海の夜色は僅かに林色を呈するのみ。海辺に島あり。
は島の如く黄色蒼然として陸地島を浮べ煙一様の夜
に消えぬ。

千萬にても此日は全く少し。野[illegible]の[illegible]
通行下船せしとす。新在岡は氏を訪ふて二時を[illegible]。[illegible]
居住[illegible]少時を[illegible]。[illegible]一人を得て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

出づれば断崖上りて後は縁地たる山底なく隆起せる
り。仰げば巌山前に聳え怪巌を擁し 二十日の月庭頭に落ちる
形若草をおくるに似たり 西方の新緑を望み
郷となし、譲中に如く逆らひ難く万象粛として秋気人に迫る。此
にして此陸なる千古野沢の村落に至る。先づ松林と人家に注え
て誤りの跡をなす。怪石を下りて十数町
す。果樹繁り行けば野沢の温村に至
紹介の行くに終りて後の如

十四

会津若松に中々居りたる中途に[illegible]記事多くの様
居に候ふ

[illegible] 下

怪巌霊洞（その三）

碧雲

廿四日（八月十四日）

中の華鶏の声遠近に野沢のさとの明けた
涼しき。
庭に下りて口すすがんと立ち寄れば垣根あたり（会津は近年牧畜業を奨励す）
に南瓜花さく。
六時起床、前は村長並村長等の厚志によりて得たる居
原氏の別宅。前は稲田を隔てて翠巒に対し、野根の
煙家を右方に見おろして、
朝餐を了へて、田部氏と共に日本校に至り、永
野村長の開導に因り七つ穴の奇勝を探らんべく[illegible]

七ツ穴
天洞穴

山間の小径を辿りゆくこと半里にして達す、船頭はすぐに船
を艤して待てり 少女等同じく舟に乗る 船頭は舟を岸の根
之に寄す 人々舟中を存す 撰折にして 之にの岩浪 砕 岩
の船出したる所なりにて 左の岩 [illegible] の洞窟に 闖然
の松を抱いて行くに ~~[illegible]~~ 幕岩 並の前 [illegible]
右は 立並ぶ島 蘭島の名延べく 絶えたり 松島は 平で
華松尚なく 風岸 濱舟 其の方に 進撃して [illegible]
左手の島を左にして 構 [illegible] 船進み 北岸の中 [illegible] の 突
又 東北の [illegible] 平 [illegible] 手 島の 松島と この松島の [illegible]
さりとは [illegible] 乱に [illegible] [illegible]
船は 怪岩 奇石の 間を くぐりて [illegible] 静風に 帆を あげて [illegible]
船は 本 [illegible] 自然の 姫 [illegible] [illegible] 長 [illegible] を 口に 見 [illegible] を

△ 潜は 俳句に 秋を [illegible] 深ば [illegible] [illegible] 座して 快速 [illegible] [illegible]

ロ 春塊薪心
舟楽漕進 ぶ船
して松を岸 溜
浴去楽

左天に 仰ぐ 同 [illegible] [illegible] 如し 配 [illegible] [illegible]
眺望 [illegible] 沖 [illegible] 浦 [illegible] [illegible] 産 [illegible] [illegible] 文 [illegible] 屏風
を列したる如く 光琳風に 松樹 その 古 [illegible] [illegible] [illegible] して
下 [illegible] 北 [illegible] 方 [illegible] の 浦に [illegible] [illegible] 同 門 [illegible]
さ 奇岩を 抱いて [illegible] 松 [illegible] 水に [illegible] 華 [illegible] 浮て
洞門 [illegible] [illegible] 十数 [illegible] 七ツ穴 [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] 洞門 [illegible] 数丈 [illegible] [illegible] 日 相 [illegible] [illegible]
本 [illegible] 来 [illegible] 出に 舟を [illegible] 洞 [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] 洞中 [illegible] [illegible] 中 [illegible] 一 [illegible] の [illegible]
径を [illegible] 即ち 舟を 捨て 標 [illegible] 上陸す 洞 [illegible]
て [illegible] 舟に [illegible] [illegible] [illegible] 中 [illegible] 洞 [illegible] を
[illegible] [illegible] 二 [illegible] 午 [illegible] 時刻 [illegible] [illegible] [illegible]

洞門より出て行けば汁石の根林井あり 西方寺の北隅にして [illegible]

小川島の東北 真南西に位置し 海石 経の如く 磐岸 [illegible]

[illegible] 陸地より 細く流れつらなり 出ずる如く 青海を [illegible]

ある島あり 海上陸のた十八丈 隠れ海瀬の [illegible] 限る也

す

[illegible] 海上一聲 [illegible] 荒山有 小聖寺 [illegible]

[illegible] 細 [illegible]

洞門を出て行けば 沖石の渡村に近く 岩下にあり ここは西方寺の北隅

[illegible] 十六島の [illegible] 小川島の東北 [illegible] 海石 経の

[illegible] 北面 [illegible] 青 [illegible]

[illegible] 島にして 海上陸 [illegible]

沖 [illegible] 隠海 [illegible]

この [illegible] 海に美しく ことに岩 [illegible] 候 [illegible] は万 [illegible] の報

[illegible] の如く 奇 [illegible] 満激し 見山有小 [illegible]

[illegible] 大 [illegible]

[illegible] この [illegible] 大

[illegible] 沖石の海

[illegible]

[illegible] 十三 [illegible] 大 [illegible] の [illegible] を [illegible]

[illegible] 二十二 [illegible]

[illegible]

アイノ [illegible]

水の上下 [illegible]

[illegible] 棕を [illegible]

峠より巻き植立を経めし番也は納鎖盡して奇也（一に石也）と云ふ洞は
布在せに新居に依ると云け地すなく船は往せ灘の外海に出ず
岬形のうちより 怒濤奇又 散乱弥漫 海府巌壁を撤歩して近洞
崖を巻開く二ケ色が満岸の地形を有す 其中の岸の[illegible] 怪叢
重洞の形を言ぬと云ふ 奇人にてうたと唱ふるを任す 三ケ洞窟と守る
其中奇洞は四室を巡らす 四周を以て 深き淵を洞内の奇勝をなし
洞門壁狭くして僅かに舟を容るべく 漸く入れば やや広闊と
[illegible]は高さ十丈 [illegible]
[illegible]
[illegible]
△[illegible]
[illegible]

黒の深潭直ちに奇巌の底に如かよ了りかと疑はる、
あやしくも奇しきは浪の力かな ここぞ潜戸の岬
の岩窟
洞門なくして三個あり、ここを出れば、烏島黒島その前に横
はり青松様に映じて蒼翠粧ふを得し、やがて舊潜
戸に至る、これまた岸頭の一大洞窟あり、左角をよぎて
洞内に入れば如何にも一大霊庫を成す 隅みに立つ石燈籠を
[illegible]一体の燈籠の如く[illegible]
[illegible]
[illegible]

雨の京都

碧雲

八月三十一日午前拾時半松本氏等の一行と別れて京都に向ふ。雨細く降り出でて

午後二時京都停車場につく。同伴者数名の中たかはしに来宗次にて東に、某は直ちに大坂に向ひて、ここにて下車せしは予と和田彬枝女史のみ、井原氏よりの嘱托ありければ手荷物をうけ取りて向くれと世話しつつ我と[illegible]聞きつつ三條小橋高屋に投宿しぬ。

[illegible]下婢に案内せられて三階の一室に通さる。雨雲低くたれて未し暑きことなかりけし。[illegible]浴衣ときかへ

桐ヶ丹一抹の玉露に渇を醫して やがて名所見物の
為車を命じぬ（大将は前札の裏面に名所番附を記
のすを持ち来りて 之丸丈を見るには半日二日を要すと）
東山は既に見つ 今日は北野より金閣寺に往て明かな晩
嵯峨御室[illegible]の旧跡をたづねて
半途にて（車を却りて）金閣寺に向ふ 鞍馬口通りを北に曲
り[illegible]に出で 浄花地に出づ [illegible]の[illegible]に[illegible]
大前に鎮守[illegible]山 鎮守の[illegible][illegible]
[illegible]印[illegible]口野に[illegible]
[illegible]なる[illegible]を[illegible]
[illegible]に[illegible]一面に若草[illegible]松樹[illegible]

松樹その間に點綴して 幽邃なり、車夫は車を止めて
無用の[illegible]を説く
[illegible]花寺[illegible] [illegible]十[illegible]に[illegible]樹木[illegible]て[illegible]
の幽邃たる池に[illegible] [illegible]の[illegible]
[illegible]この[illegible]を[illegible] [illegible]
花[illegible]紙[illegible] [illegible]
寺門を入り[illegible]を[illegible] [illegible]
に入る この[illegible]は[illegible]十[illegible]
の[illegible]は[illegible]
[illegible]寺は[illegible] [illegible]金閣寺、[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]に[illegible]

法性院名工が才のすさびにさける時代の[illegible]を悉ひ為匠
が数多の名人に当たる[illegible]の名碑を十六人とするも
薬師寺は既に存せず これを除けば陸奥松島寺一山下の名不存
小松の天人法華経[illegible]に記す事これにて[illegible]物に[illegible]
立派にて蓮華一派と言うべく[illegible]
存[illegible]すなわち新経[illegible]を[illegible]
すなわち流[illegible]とも[illegible]
の[illegible]流[illegible]
少僧の[illegible]問く[illegible]
家[illegible]の岩[illegible]
一派の[illegible]に[illegible]一族 ― [illegible]
華[illegible]と[illegible]国[illegible]

松永のただすまで世の幸ならず手銃出窮更に御庄を洗ひ
弘法の寺伝により全国に上る開山四尾より下房を法水院
といふ正面の二重は蓮座の作東塔は開山寺宗门前西塔は
開基義海にして 国宝に列入せられたり 楼门は前面
は桃山時代に降下 夜相石在帝石若林島鶴亀島あり
布生形大の妙を極め数百の庭石上に背を沈けて挺でて
法蓮華島もかくやと思はれる。
中房は湖吉国洞と云ふ 恵心作聖観音を本尊とす 明応四年三
は弘法大師の作 三井の東に移り[illegible]の筆と伝へらる
上房は光堂屋とて 法小松天皇頼朝の勅額を掲げ 宝前一
面に金箔を貼布せしが今に剥脱して その痕跡を止めたり
升、楣によりて眺望すれば西方松樹前を華れて[illegible]

たちが如きは為川在衣笠山なり　其の昔紫式部の侍書館を
如キ君大に白蓮を華ちらして趣覚に法せりといふ此に
こなりき
　その上の山なの所やこ三なくん北山の南のうちくれ水
南をすぐて北国に入る　株木藍石の紀里まる見なくす、萬萬よ
り清出す流水は錦河水として於海山の響なる水なくまとか一
掬すれば流到咽を利すか妙
鵜門深和泉橋古長澤（北ノ方）東人探（ハの方）古と東なる
郊係の該所にすぎて多住寺下なる　熱水庵あき執業術道
の要所にして増運院は金売吉次の生涯にあり　義経の薬師堂の寮
柱は古名のものなり
其北橋は~~有~~義経が左方の所なる　これって左因の紋

此辺り石仏は給田寄賛寺で初めて誘い　給近につく

湘南の山水

背に矢は負はじと誇りし関東武士が栄華を極めけん鎌倉の故都も、麦離豆圃に埋もれて、和田畠山千葉三浦、さては梶原屋敷北條屋敷も蛙なく野らとかはりては、鶴か岡八幡の丹殿朱楼ひとり昔ながらの色を残せるのみ、銀杏の老樹長へに天を摩して、星月の井今に清冽を誇れども、七百年のおもかげ見るべくもあらず、秋烟霧の痼疾未だ全く癒えず、遂に吟杖を駆って湘南の山水に一夜放浪の夢を結びき。

鎌倉停車場を出て、鶴か岡八幡宮の第二の鳥居を北に行くこと数町、封鶴楼といふに投宿せしは、五月二十九日

午後なりき、宿の御下御所御鎮宮奉拝すつ、一椀の渋茶に渇を醫して、ひとり八幡宮に詣づ、境内の梅樹既に實を在りて、若葉にそよぐ風、何となく心地あしからず。

大鳥居を入りて大鼓橋を渡れば正面に拝殿あり、石階を上り八幡宮と額せる朱塗の楼門をすぎ、神前にぬかづけば、白鳩紫鳩嗣ととして朱欄に碎り、また去つて高く楼端にひるがへる、宮は康平六年頼義の建立にかかり、源氏累代武運長久の守護神として崇敬あつかりし処、社殿の宏壮輪奐の美善なる言を待たず。

次て神庫に蔵せる寶物を拝観せり、源家累代の寶刀髭切を始として、頼光の佩刀鬼神丸、義家の佩刀天國など幾十の刀槍、光鋩陸離として瞳を寒からしむ、東照宮の御像は秀忠の刻天海の開眼せしもの、清正か遺物南無妙法蓮華経の指物と相對して多少の連想を起さしむ、

けしき立つ雲の一すぢ引きすて霞に残る春の曙
嘯ける音の葉草に惹むは秋の夕の眺なりけり

の一軸は左衛門尉楠正成の筆にかゝり、筆勢の優美なるそぞろに公の雅懐を忍はしむ、大塔宮遺愛の笛は樺しせ本二、蝉折二笛の塗色剥蝕していたく原質を損せるは、後醍醐天皇の宸翰の軸物と相對して建武の昔をおもはしむ。

重衡か琵琶千手の膝琴、敦盛か軍配、青葉の笛、に盛者必滅の哀れをとどめ、曽我兄弟か遺物、虎女か縫箔の小袖、すては静か着りんどうの紋うつたる舞衣の中袖、緋の袴、色は

あせた躰ども、何れが嘉喜兵世が當時のかたみならざる。

鶴ヶ岡神の教が世のつつは家の弓矢の守なりけれ
来路の沖しる神の手向とて杉に矢立つる疋楠のやま
優裳の若公達を以て世に謳はれしますらを詩人實朝の
詠草などり書の書體、優美といふにあらざるも、放逸の氣
象自らあらはれて、公が遺物たる人丸の像と共に
運慶が新獣、住吉明神の像は門外漢なき我等が眼にも
崇高の念を起さしめ、石橋山の白旗に源氏勃興の哀残を
留め、相模太郎が奉納せる蒙古戦擬鎧覆の涅槃に明治
三十七八年役の戦利品と相待ちて、神威宏揚の刹顕をこ
ゝにも得たる心地せり。

懐古の想に酔ひて楼門を下れば、石階の下なる銀杏の老
樹は大さ数圍、枝葉繁茂して老幹高く天に冲し、魔風一陣
樹梢を過る時、あはれ青年詩人をして千秋の恨を残さ
しめし処、春風秋雨七百年、教老樹に封して恨なき能はず、
下りて若宮に詣づ。仁徳天皇をまつれる処、傳へ聞く判官
の愛妾静が致舞せしは此の拝殿なりきとか、あはれ興
たる一白拍子の身を以て、飛ぶ鳥も落さんずる鎌倉将軍
の御前に於て、其千秋万歳を壽かずして、吉野山ふりし
人の跡を謡かにうたひ出けん、逆りんどうの水干に緋の袴
はいたるすがたのたゞしげ、目に見るらん心地して、阿諛
諂媚の今の世の者の手本とは葉にも宣なき心地して、似
個者の能はざるものゝ時。

頼朝公を祀れる白旗神社は其右にあり、社殿は前ニ者に
比すべくもあらざれども笹りんどうの銀紋いかめしくそゞ
ろ荘重の感にうたれぬ。
鎌倉の地図を求め、師範学校の前をすぎて郊外に出づ。八
町四方と聞えたる頼朝の館、北條の邸宅、畠山屋敷など二
のあたりとが、茫朧水田の間をすぎて行くこと数町にし
て官幣中社鎌倉の社に詣る。大塔宮を祀れる処、二階堂か
谷の麓に位し、明治二年の建立にかゝり、白木造り萱葺に
して素朴高潔人をして襟を正さしむ。
見うしろに土牢あり、垣を廻らし正面は板塀を以ておほ
はる、岩壁を穿ちたる洞窟にして、窟内うす暗く、下ること
一丈三尺にして八畳敷の洞窟ありて札宮の二とらせ給

おはし処なりといふ。宮の悠然に侍せし南の方を祀れる社
は村上義光の祠と相並んで本社の左側にあり、所謂首塚
の地は社を距る数十歩の地にありて木柵を廻らせり。
帰途頼朝の墓に詣づ。峻急なる石階の上、石柵を廻らせる
方形（五重の一高六尺）塔青苔面を鎖して文字見るべからず。雄南郭ずして
嗚呼快男子ぞ純州にしめし公の遺跡空しく草葬に埋も
れ墓所徒らに老松にうそぶくのみ。
帰りて馬場小路切通しを経て建長寺に詣づ、寺は時頼の
創立にかゝり五山の第一にして総門の額は寧一山の書す
る処、山寺の構造は宋風を模して結構の壮大なること鎌
倉随一と称す。時に日漸く暮れて老杉の梢を離るゝこと
三尺十二日の月は冷徹として清寂言ふばかりなし。

明月院は二、より又聞けど賞鐘座敷しこのあたりと聞
けど平数へくしおらず、せめては圓覚寺にと志しつゝ淋
しき路間の跡を辿りつつ行く程に狂犬二三匹のわやし
き海駐舎を錦めて吼吠路を遮りて進む能はず、日は暮れ
て二百里の異郷狂犬に吠えらる不快言ふへからず、しかし
も千仞の功を一簣に缺くに忍びず急ぎ圓覚寺の山門に
至る、老杉森々として月暗き処門扉固く鎖して入る一かな
らず、即ち歩を轉して帰途につく、馬場小路あたり再び狂
犬の咆吼にあひ、翁望宿に帰れば、家婢帰りの遅きを怪み
我顔を諦視すゝしめる時、實に左手に半ば開きたる地図
を携へ右手に手帳と鉛筆とを握れる様あまり見よくし
あらざりき。

入浴して晩餐を了へ日記を整理す。隣室の客しきりに酒
を呼んで喧噪聞くに堪へず即ち起ちて八幡社内銀杏樹
の下に逍遥す。

洞内蒸暑く濕氣身を襲ふ。此處下りて一丈三尺に
して下層に入り登路の洞室あり。二本龍王の立ち並ぶ姿有り
如ありと。鳴守天に二日露く國は二丈余なりがしこく進
其の洞奥をなして鍾乳石化字になおす。其の長一丈に依
つきさき一 流れ或は傳わり洞前を丁尺に日本又は奥東方に
あり
鳩金彩朝文墓に移り、磐窟る左階石上五柱を拉覗

昭和十四年七月十八日

小學校尋常科卒業生に施す農業補習教育をして吾が國の現状に適切なる効果を收むべき方法如何

島根縣八束郡林原村尋常高等小学校長

真原福市

わが國の農業の現況……農業学校の通弊

尋常小学卒業生と農業補習教育の必要……実業補習学校規程とその活用……農業補習学校とわが國の民度

……最も適切なる農業補習教育の方法……結

農業補習
父母講話會……農會との関係

[illegible]

わが國は古來農を以て國本とし三千年來瑞穂國の美稱を負ひて國民生産の大部分を占め文化日進の今日なほ全國民の三分二は農民を以てみたさるゝ實に盛なりといふべし然りと雖も翻って社會の状況を觀るに近時商工業の發達と共に農業家もまた久しく惰眠を貪るの時期にあらず、將來の國是を農業にとるべきか工業にとるべきか、はた商業にとるべきかは暫らく措きて國民の大多數を組有せる農業教育の急にすべからざる今日の如く急なるはあらざるべし。

近時實業教育の聲都鄙到る處にかまびすしく各地競うて農業學校の設置を見るに至れるは誠に賀すべきの至なりと雖多くは設備の完美を競ひ學科の高尚を誇り一般農民の希望を充してその恩澤に浴せしむるを為さず地方によりて衣食する不生産的の農業學術家を造出するに過ぎず吾人は少數の農學者を作らんよりは寧ろ一般小農者の子弟をして洽く農事的知識の素地を涵養せしむるの急務なるを信ず。

今や就學督勵の結果わが國の就學歩合は年々

著大の進歩をなし國民教育をうけて社會に出づるもの年々數十万なるを知らず然りと雖これらの國民教育修了者は直ちにわが國の農民として適當なる素養を有するかといはんに吾人は未だ以て然りと答ふるに躊躇せんとす否天下一般の人士は四ヶ年の國民教育を以て國民教育の完成を期すべからずとなし義務年限延長の聲は各地に起るに至りぬ。既に尋常科の卒業生にして今後の農民としての知識不十分なりとせば之れを補足するの方法

を講究せざるべからず、義務年限を延長し或は農業補習教育のために一ヶ年若くは二ヶ年の學校教育を施すを得ば論なしといへどもわが國の民力は未だ俄かに之れを許さゞるを如何せん是に於てかわが國の現状に最も適切にして最も効果多からしむべき農業補習教育の方法を案出せざるべからず之れ吾人が論述せんとする主點なり。

以上の條件に適切なる方法を論究せんと欲せば勢ひ左の三者に注目せざるべからず三者とは

即ち経費、時間、地方の情況これなり。
現行の小学校令中高等科の課目には實業に関
する課目を加設すへきことを規程せられたり
といへとしこれ實業補習教育を以て本来の目
的となせるにあらず ここに於て實業に関する
卑近なる知識技能を授くるため實業補習学校
（農業もこれを含む）規程は発布せられ或は季
節を限り或は休業日を利用し或は夜間の開校
を許し成るへく運用を自在にし應用を敏活な
らしむへく補助金を下附してこれを奨励せらる

るは誠にその當を得たるものといふへし 然れ
とも實際の状況をみれは高等科を設置するの資
力に堪へさる農業地方の町村に於ては已むを得
す農業補習学校を設置し若は農業補習学校な
れとも高等科の科目に農業科の時間を多く加
味せしまでにて即ち中等教育の準備と農業補
習教育との合の子にして真正の農業学校の精
神は没却しさらんとするの傾向ありこれ農業
補習学校として一定の年限と時間とを定めて
規律的に農業の補習教育を施すれは経済上今日

の非戸
の民度に適合せざるにあらざるなきか。
次は（また）時間につきて考ふるに専農耕を本業とせる
農民の子弟は家にありては各、家事の補助をなし
以て生計を助くるを以てこれらの児童をして
一定の年限間毎日（たとへ半日にもせよ）学校
に入らしめて農業の補習をなさしめんは時間
に於て許さざるなり若し強いてこれを行はん
か中流以上の農民の子弟は收容し得べけんも
多数の小農の子弟を收容せんこと難しきに
至らん。或はこれを夜間に於てせんも晝間疲労

の
の休息時間を奪ふのみならず家業の都合上一
定の年月と一定の時間とをこれに専にすること
と能はず或はある季節間を缺き或は早退にし
て業を癈するものあるべく其の出欠の頻繁なる
て到底嚴かならざるべからずして一定の年限を
規定し一定の規則の下に学校によりて農業補
習教育をなすは時間上今日の民度に於ては
未だ之を許さざるなり。
次に今日の農業補習学校は地方の情況に適切
ならざることこれなり（規則の不完全なるに

あらず）その教授事項即ち農業教科書につきて見るに何れの地方にも適せしめんと勉めたるの結果地方に切實なるもの少く（教授上斟酌はし得るも）たゞに農業の全般に亘れる知識を普遍的に要領を摘記せるを以てある一事項につきて實地に應用せんと欲するもその知識不十分にして一般の農夫にすら劣るなきを保せず吾人は一般小農の子弟としては廣く淺く各種の事項を悉く教授せんよりは寧ろ狹く厚くその地方に特種なる事項を教授するを得

策なりと信ず、即ち米作地方なれば稲の選種苗代の作り方場所の選み方より移植除草肥料害虫驅除收穫米の製法俵の造り方輸出入の現況に至るまで最も詳密に教授し他の甘蔗または藍のごときその地方に栽植せざるものは全くこれを省きて可なりと信ず。今日のごとく播種肥料適地作の土質各科各種に亘りて乾燥無味なる抽象的事項を教授するがごときは一大誤算といはざるべからず。

前述の理由により吾人は現今の情況に最も

適切なる農業補習教育の方法は短期講話會の開設を以て最も得策なりと信ず今其の方法につきて詳述せん。

一、時期は一定することを要せず季節に應じ農事の繁閑を見計ひ或は必要に際して三日間乃至十日間卒業生を召集して農事講話會を開設するにあり即ち選種の期節にありては籾種選種の講話會を開き実地練習と違て各自の籾種を選ばしめ或は害虫發生の季節に際しては害虫講話會を開きて其の習性變化被害の状況驅除法等を講話し或は開花の季を利用して果樹栽培の必要を説き土壌論肥料論の一般を講話すると
す等休業日を利用し夜間を使用するなど機に臨みて活用することにありかくすれば学習者をして愉快を感じ且つ直ちに實地に應用し以て發明する処少なからざるべし現にわが校に於ては本年夏期休業を利用して害虫講話會を開き大に實効を認めつゝあるなり。

二、場所は妨なき限りは小學校を使用すべく區域廣大に失する時は時日を變更し或は各部落

の集會所村農會役員の私宅を借り大なるも可な
るべく、三、講師は主としてその小學校職員に依
托し村農會長村外篤農家に補習を依托し時に
郡縣農會又は農事試驗場より招聘するも可な
るべく、四、教科の如きは始より一定するの必要
なく時に臨みて適切なる資料を選び教科書購
入の必要なく、時には要点を筆記せしめて足るべし。
五、經費は前記の方法によれば會場の借料講師
の謝儀は僅少なるべく雜費も多くを要せ
ざるべし、もし斯くの如くすれば職業の妨害を

十足のみならず時間上
障

なすことなく時間に差支なくして多大の効果
を收むることを得べし。
又は小學校職員役場吏員は協力一致して大に
誘掖奬勵の勞をとり（村會は之れが事業費を保障し）村農會郡農會は之れと相
提携して指導の任をつくす時は時間經費を費
すこと少くして地方に最も適切にして最も効
果を收むべき農業補習教育を施し得べきなり

校地

慶應義塾幼稚舎

[illegible]

慶應義塾は、芝三田の高臺にあつて、品川湾に臨み、七砲臺を眼下に見おろして、青山一帯総房半島に対して海陸の形勝を占めて、優に府下第一の校地を以て誇つて居る。其上には大学部中学部寄宿舎との宏壮な建物があつて、後の方一寸ゆるく坂を下れば幼稚舎である。刺を通して参観を請うた、職員は丁寧に説明し且つ案内してくれた。本塾幼稚舎は明治　年の創立で、修業年限は六ヶ年とし、卒業生は直に本塾の中学部に入れることに連絡がついて居る。生徒は目下百六十名で四学級に分けてある。教科目は修身・国語・算術・体操・英語

図画　で英通教授けれい　である、まづ
授業の各組を清ふと、主事は授業の方法について元来
放任主義を取つて居られる者なることも考へられるが、寄
宿舎取締の件についてまで批評して少なからぬ事であ
つた、主事の先導によつて多数の者を意識した、授業は
形式的に縛束しない割合に自治的に熱心に華を
うけて居る、五学年級に一人の支那人が居た、主了すれば
此、浙江省の産で（年齢は十三とかで）父は公使館附の官吏かなにかで居る、入学
以来一年半を経過したと云ふのである、英語漢語は相当に従
国で習熟して居たから日本語は初めてであつたさうだ、
打ーも国語科の教授であつたが音声は到今に明瞭にして
独くと邦人とかはらない、漢文をよくし英語もよい方であるが、

真的な智識は至つて乏しいとのことであつた、其兄も六年位
前から来て居る相だ、読本などで、日清戦争の記事
を読めば、兄は年長者丈け、不快に感ずる様子なれど
弟は中々元気で、僕は士官になる目的だから、今に見ろ
日本をやつつけてやる、と高言して居るさうだ、但し彼は能
く性質でおとなしいことがある、他の日本学生がにかけして、おとなした
物に難で謹んで居るから、職員も常に注意を怠らない、近来
また、ヒリッピンから生徒が十余名来て居る、英語は出来
ないで日本語を解するのは少いだとのことであるから、随分困
難に骨がおれるであらう、
次で寄宿舎に案内された、寄宿舎は校舎の後に並んで
校舎と大抵同じ位の木造二階造の建物である、寄宿舎

其日下ら人任で、風呂場、便所など清潔なものであった。自習室、寝室、食堂等別れて居て、室内はすべて上草履を用ゐて清潔にしてある。自習室はテーブル椅子で、一室二十人位で職員が之を監督して居る。夜間の採光は洋燈であったようだ。食堂は一室で大机に向きあって腰掛てやるので、机上に各自の膳が配置してあった。生徒は主に富豪の子弟、軍人、紳士等の子弟で、平素贅沢に育てられて居るから、一ヶ月の小遣費用二拾円以上を要するとの話であ[illegible]ず、食物がまずいとて、夕食の[illegible]は箸をつけないのには困る、が運動をすゝめたりやらせるから、腹が減るに従って、自然に箸をつける様になるとのことであった。寝室は二階にとられて、何れも寝台の上を用ゐてある。厚い敷蒲団を重ねて、冬は

白毛布六枚を与へるとのことである。地方の師範学校の寄宿舎などに比して寝具の上でもある。職員は生徒と同様で其一隅に起臥するので、家族的に父と子との関係を保つて居るとのことであった。

修身科教授につきて、意見をたづねたに、徳目の順序によるとか、教科書を[illegible]いて用ゐるとかするには及ばぬとおもふ。無論こゝでは教科書などは用ゐない。修身教授は自ら受持って居るが、それに日常生活の出来事について、道徳的に導いて話して居る。元来修身科の目的は事柄を覚えさせるが目的でない。實行に伴はない修身教授は、少しも益がない。本塾では實行といふことに重きをおいて居る。決して福澤先生の修身要領について尋ねたに、別にこれとて教授して居ない。ない

目的とする処はこの要領に従いて訓すので、器械的に注入はしない、自ら進んでやるといふ風にしむけるのである。
独立自主を重んぜしめる、寺塾の主義として、生徒を束縛せずして放任せられた結果、いかにと尋ねたに、主事は如何にも生徒は兎角器械的に束縛せんとして、自治といふことを重んじて居る、就いては幼年生の行儀は放縦すぎる様の感もあれど、規律を守らせるといふことについては、非常に厳重にやって居るつまりしまりがついた、自分で自分のことを処理するといふ習慣をつけさせて居る、運動の如きは非常に奨励して居る、幼稚舎を卒業して、中学部に入っておる一二年の間は随分活潑すぎて乱暴な風がないでもない、之に反して地方から入学した中学生は余程温順で、むしろ言へば屈従すぎた様に見える、

が、次第に進級するに従って、地方出身の生徒は、粗暴にして放逸の傾が長じて来る、幼稚舎出身の生徒は、上級に進むに従って、自治といふ心が出来て次第にしまって来る傾がある、此辺が正反対の結果をあらはして来るのである。ここは教育者が大に研究すべきことゝおもふ、随分規則づくめで養成した官立校の卒業生に比して、寺塾出身のものにはあしゃんとしたしまった人物もあるのである。
教科書について尋ねたに、目下たしに全検定のを用ゐて居る、もとより完全のものがないから、新らしい教科書が出来るに従って善いのを採用して居る、公立とちがひ、此辺は稍自由であるから、少しでも善いのが出来れば直ちにかへる、七八年も以前に出来た旧教科書を今日採用せねばならぬと

ふは、ここが公立のだけかも知れないが、かく規則づくめにするのが大不賛成である、国語科として具体を読み方話し方綴り方書き方などいふ様にして、教授することは本塾は早くから既に實施して居たが、

次に、図画教授の新工夫について、意見をもとめられた、是は始から鉛筆と定木とを用ゐしめ、第一課から順次に(図)工夫して画かせるのである。

一、横の直線　一寸のものから六寸迄

二、縦の直線　仝前

三、斜線　仝前

四、並行横線

五、並行縦線

六、並行斜線

七、二線の結合　┐　└　の如きもの

八、三線の結合　コ　［　の如きもの

九、四線の結合

右の如くして、簡単な物形に及ぼし、漸進曲線を加味して種々の體形を画かせる為、夫々順序を追うて六七十図も其標本を示された。

上述べ来つた処は、町村立小学校とは稍趣を異にする処はあるけれども、さすがは明治の大平民たりし福澤翁の私塾、理想的の小学校として、大に参考となることがあるであらう。

わづらひ

つくづくと、こしかた行末を思ひて、遂に眠ることが出来なかった、昨夜(ユウベ)も、一昨日(オトヽヒ)の夜も其前の夜も、ーーー[illegible]と鳴る動針の響がいよいよ冴えて、もう一時にもなるであらう、室内はしんとして、闇に包まれて居る、中庭を隔てて垣根のあたり遙かに虫の聲が聞える、定ない秋の空ははや雨になつたらしい、しめやかに前栽の木の葉に音づれて、深き秘密をさゝやく様な感じがする。

あゝくだらない、と、熱考が羅追りようつたが、あひにく神経は、いよいよ鋭くなる、眼はいよいよ冴えてくる、なやみ、わづらひ、さまよひ、脳中にわき立つて来る、あゝ遂に睡ることが

出来ないのであらうか、永久にこの疑問をとくことが出来な
いであらうか、あゝなげかしき我妻よ、最愛の妻よ、もし出
来得るならば、誰に迄もあきたくないのである。
我も妻も家に生れ、身を軍籍に委ねて居る、汝も久朗子爵の
長女、つれ添うてから五年の歳月、一度も風波おこらず、一
昨年武雄をあげてからは……
北清事件の為俄かに離情することになつたのは、忘れもせぬ此
昨年の十一月二十日……先月凱旋の際いつも停車場に
出迎ふる最愛の妻を見なかつたは、この度が始めてであつた、
けれど臨月にあつたなる故、数よりて随しあへき訳はない、
帰艦後数日を経て妻は生家に行つてまだ帰らない、用務の繁
忙につれ訪問もしなかつたのに、この月の中旬、突然死体が

親の通知が届いた、我は驚いた、我れて殊使なあの離縁で
状の日、ただわれるものがあつて、妻が手紙から一束の書類
を得た、封筒の上書を初めしく感じた
それも一ばいつやら名のない書類を見出したことがあつた、
さすが……と思つて手はも読まなりず屑箱に捨つてしま
つた、
謝罪会の席で、親友の某が最愛の我妻に関して忠告してくれ
た時、我は大に憤激した、我名誉を害されたかの様に、神聖
な愛、純潔を売……失敗なる
んだ、だがそれをあやまらせた、
我はこれまで妻に対して一毫の疑を抱かなかつた、……
にんな事についてたびも口にも出さなかつた、神聖な汚すに

恐ろしいから、純潔な彼が心に誘惑ほ異一にに恐れないかな、
が、かれと思ひこれと思ひ、ことにその手跡が相似て居る
に一方ならず驚いた、
我々この時に当つてもなほ事なかれかしと心に祈つて居た、
関誤して非常におそれおのゝいた、悪魔の誘惑たる一つの妻の境遇に
對してなほ然合の同情を表しつゝ、
然迫の書翰の中には、まがふ方なき妻の手跡もあつた。然し
はず我は絶叫した…………
我は永久に救ふことが出来ない汚点を心身に受けさせるを得
ない境遇になつた、我は……我は常しへ心ある言葉を持たぬ、良人
……最早何とも云ふ心も……我は書く心も筆もなくなつた。
嗚呼なんかなき我妻よ、何が故にかくもまで一る、今汝は神
の前に罪を宣告さるべく切迫して居る、この際に於てもなほ
我は及ぶだけ其罪を軽くすべく、為し得る事ならば無罪を宣告
するべく弁護の位置に立ちたいのである、が、今汝の罪は彰
然としてあきらかである、せめてこれがなければ或は……
十二月〇〇日附の書翰……あゝかれなる妻よ、汝は終に死
罪の宣告を免れることが出来ない、あゝ我は神の前でいつは
りを述べることが出来ない、その宣告に對して難いかな抗弁
する弁護をなし得ない、あゝ悔恨……悔恨は實に尊いもので
ある。
あゝ円満な我家庭は破られた、永久に無限に、あゝ純潔な我
愛が汚された、永久に拭ふ無前に、運命も——理想も……
ことに、ことに、憐むべきは無邪気な武雄である、お母さん

なぜ帰らないの、僕は遊びにゆく、あゝ何と言つてよからう。

我一生の非運はなほ忘れることが出来ぬ、みなし児として行末のろはれいかなれが、生涯消すことの出来ない汚点を持たなければならぬのであらうか。

我理想――我名誉をまちつきやうちやつて、罪のない武姫を救ふとしようか…………

（明治三十四年十月四日夜記）

別れの曲

碧雲

あゝ汝少女よ、われは汝を少女と呼ばん、吾いまだ、前髪をあげてより間もなき子、一たび汝を見てしより、深き〳〵恋にまどひぬ、世に恋といふもの、ありとせば、やがてかゝるをしも恋とやいふらん。

汝に別れをめてより、日として汝に親まざる●はなかりき、夏の日足の永くして、いたづらに物うき折しも、汝をと見れば、あやしく心なごまさるが常なりき。

吾さゝやけき小指の汝が袖のへに触るゝ時、あゝわが全身の血はもえ立ちて、遠く遠く天上の楽園に遊びたらんが如く、汝が幽かなる胸のさゝやぎは、さながらうるはしき夢に酔ひたらん

待たざるに時は来りぬ、夏の休暇の四十日、我には父あり、吾には母あり、あゝ吾は暫し汝と別れざるべからず、あゝ汝少女よ、わが心は汝よく知れり、われは汝を忘れじ汝もまた・・・・。
時秋に入りて、再びかの女と相見るべき日は近づきぬ、夜毎〳〵の夢は只うるはしき彼の女の身の上なりき。
突然・・・・・・・・電ト突然・・・・・・悪魔は吾を襲ひぬ、われは[illegible]うるはしき汝少女を棄てざるべからず、汝が前には萬能なりし我力は、悪魔の前には無能にてありき。
あゝ九月二日、再び汝と相見るべく、待ちつゝありし日は、今や永久の別離を宣告せらるべき・・・・・悪日にてありき。
あゝ汝知れりや、吾汝を棄つるにあらず、汝われをいとへるにあらず、しかもわれは、汝と離れざるべからず、この理・・・・・

が如く、なやみ、わづらひ、いたみ、かなしみ、すべて人生の苦しみといふ苦しみ就のがれて、われは只うるはしき夢に、うるはしきこの世界、うるはしき汝と、永久にあるべうおもひぬ。
あゝわが小指のわあさき、心弱しとのたまふか、實に吾は・・・・若き子なり、か弱き子なり、さはれ汝が前には、神の威力も持ぐるを許さず、實に・・・・・げに汝が前なる我力は、無限なり、永久にかはるべくもあらず、衰ふべくもあらず、
ある時は、汝が胸によりて、筑波根の高さ〳〵しらべに神韻の壮美をしたひ、がいせんの妙なるしらべに、ますらをの雄々しきおもかげを忍び、ある時は、汝と手を携へて、奥北の山、湘南の水、千松島の絶景に酔ひ、鎌倉山の古を弔ひて、そゞろに袂しぼりぬ、自然のひゞきに・・・・・・懐古の情に・・・・・・

この心……汝知れりや否や……
あはれ、汝と相抱いて、最後の一曲……別れの曲をかなでばや、汝も心ゆくかぎり……吾全身の熱血は、汝が胸のへにおかれたる十指のさきにこもれり……

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

曲はをはりぬ、……白鍵、黒鍵六十の、風琴の胸はうちはてぬ、
中形の桃色リボン、おちて聲あり。

（九月二十日の夜記）

別れの曲

しのゝ丸

あゝ汝少女よ、われは汝を少女と呼ばん、われはいまだ、前髪をあげてより間もなき子、一たび汝を見てしより、深き／＼愁にまどひぬ、世に恋といふものゝありとせば、やがてかゝるをしも恋とやいふらん。

汝に馴れそめてより、日として汝に親まざるはなかりき、夏の日脚の永くして、いたづらに物うき折しも、汝をし見れば、あやしく心なぐさまるゝが常なりき。

わが小やけき小指の汝が胸のへに触るゝ時、あゝわが全身の血はわき立ちて、遠く遠く天上の楽園に遊ぶならん如く、汝が幽かなる胸のさゝやきは、すゞろうるはしき夢に酔ひ

たらんかなく、なやみ、わづらひ、いたみ、かなしみ、すべて人生の苦しみと云ふ苦しみをのがれて、われはおうるはしき夢に、うるはしきこの世を、うるはしき母と、永久にあるべうおもひぬ。

あゝわが小指のわなゝき、をさな心弱しとのたまふか、実にわれは〻〻若き子なり、か弱き子なり、さはれ汝が前には、神の威力も妨ぐるを許さず、実に、実に汝が前なるわが力は、無限なり、永久(とこしへ)におはるべくもあらず、衰ふべくもあらず。

ある時は、汝が胸によりて、筑波根の高き〳〵しらべに、神韻の壮美をしたひ、がいせんの妙なる調に、ますらをが雄々しきおもかげを忍び、ある時は、汝と手を携へて、奥北の山、湘南の水、自然のひゞきに、懐古の情に、そゞろ感懐の状しぼりぬ。

待たざるに時は来りぬ、夏の休暇の四十日、われに父あり、われに母あり、あゝわれは暫し汝と別れざるべからず、あゝ汝少女よ、わが心は汝よく知れり、われは汝を忘れじ、汝もまた〻〻〻〻〻。

時秋に入りて、再び彼の女と見るべき日は近づきぬ、夜毎〳〵の夢は、おうるはしき彼の女の身の上なりき。

突然〻〻〻実に突然〻〻〻〻悪魔はわれを襲ひぬ、われはうるはしき汝、〻〻〻只汝を棄てざるべからず、汝が前には万能なりしわが力は、悪魔の前には皆無にてありき。

あゝ○月○日、再び汝と相見るべく待ちつゝありし日は、今や永久の別離を宣告せらるべき〻〻〻〻悪日とてありき。

あゝ汝知れりや、我われ汝を棄つるにあらず、汝われをいとへるにあらず、しかもわれは、汝と離れざるべからず、この理(ことわり)……この心……汝知れりやなや。

あはれ、汝と相抱いて、最後の一曲、……別れの曲をかなでば、汝も泣かん限り……わが満腔の熱血は、汝が胸の上に置かれたる十指のさきに流れ……。

曲は了りぬ、……白鍵黒鍵六十の、風琴(オルガン)の胸はうちふるひぬ、中形の桃色リボン落ちて聲あり。

海濱の逍遙

(五月十日午前)

砂白く松緑なる由井が濱の風色に酔うて、浪の色うしほの響に、ふかきくゝ心のなやみを慰め、限しられぬ感興の靈絃にふれて、詩美の幻境にさまよはんと、あしたの露まだ消えやらぬに、宿りを立ち出づ。

なべ銀杏樹のもとに、あやしき思に沈み、得ならぬ妝心のなやみやらん方なく、ホヽ蛛車の來襲にあうも、更くるまでまどろむ能はざりし名残の、うつらうつらと、夢の如く水の如き感にうたれつゝ、前髪きれし少女の群に、長谷一の道を尋ねれば、かなたなる影ふかき家の側より右へといふ。

道の両側には、新たに建てられたるは、また建てら
れつゝある、小やかなる家、旅籠めきたる家、まば
らに打ちならびき、右の方はるかに見渡せば、遠き
ひろき海原は、朝もやのうちにとざされて、うち
はしき恋の物語りの夢に酔ひたらんが如く、穏
の松風しめやかに、情き女せが恋のさゝやぎを
聞くらん心地して、星月の井に七百年のおもか
げを忍び、水没ある女に長谷をと一はついそこ
ある石段を上りてと立ぬ。
観音の立像は高さ三丈有余、楠の一本木もて彫
れしものにて、大和なる長谷の観音と同体にて、一千
年前の作なりとは、寺僧の説なりき、権五郎の
社に詣し、極楽寺に詣で、左にわかれて稲瀬に出づ。

いにしへ元弘の頃、新田の荒武者が、大中黒の旗ひ
し立てて、銀甲燦爛と、冑の星をきらめかしつゝ、
押し寄せたりけんは、此辺りなりしかと、そぞろ
昔の忍ばるゝおりしも、三尺の墓碑松の下にたと
ほの文字もあせたる土饅頭、これぞ若年の勇将
大館次郎宗氏がおくつきなりける。
稲村が崎も此辺りならんと、行きずれける男にと
一ばいとひかけしに、鍬うちおりつゝさする
のは知らずと答ふ、更にさなり、さなりきと中きす
ぎ人とすれば、彼方より呼ぶ声す、しかれがおわき
女の聲なりき。
機織れる若き女乃情けに、遠かに稲村が崎の断
崖、青松遠く浪踊ふあたりを眺めつゝ、これぞおかしこ

島まで一里半、七里濱といふ、白砂青松、山の色、海の眺め繪に見るごとし、此の間西洋人の別荘など連りて、路傍に竹垣したるなど、あながしくもあらず。

松原をすぎて海辺に出づれば、日はうららかに風和けく、若き青年詩人が南欧の天にも似たりといひけん如く、我はまさに自然の美感に酔ひたゞうち烟る若草の詩にとはれしの間、迷想に耽りぬ。

緑なめらかなる自然の肌にふれて、得ならぬ華な香りに咽び、玉の如く白く清く輝ける露のしたたりにぬれつけして、瀧底ふかくひとをみますらん人、海の女神のささやきを耳にしつつ、感極りて

我は只ひたすらに、海の色を眺め入りぬ。

夢の如く霞の如く、はるかに横はれるは、伊豆の半島にやあらん、うるはしき木々の景情は、花の帳のかげにかくれて、眺を含める乙女に似たる、江の島は近く緑りの色に白く、稲村崎の翠色、三浦半島の淡彩、遠く近く浮ぶ白帆のかげ、さながら妙なる名工の手に成れる繪画を見るが如き大ならんかなし。

あゝうるはしき海の香り、幽微なる波の音すゞぎ、我は自然に向って感謝の涙を禁ずる能はざりき。

暁を没する細路をふみて行くこと数十町、腰越の駅ハこのあたりなりけん、（満福寺といふに詣で、）判官が使りの落辯

鹿か腰越休の稿本を蔵すといへども見
るに足るへくもあらず、有名なる龍口寺の
片瀬の里にあり、汀に添うて江の島に渡る、名物の
貝細工並ぶ家、旅館と相並んで、上に弁財天の社
あり、稚児が淵龍穴などを見廻りて、一たび
目は路に出でかからんとすして、海女の子が山
にはの畑末長く、海の香、砂の香、貝拾ふ少女が
うたき一長閑なりき。
あゝ湘南の山松、江堀なる海辺の風色感興つき
すといへども、時日に限あり、片瀬川に沿ひて秋
山を辿り、藤沢道に出で、午後の汽車の急行列
車に乗りて帰りぬ。

明治三十四年六月十日夜記

ほぎごと

あなた、なぜそんなにおかん〳〵なすつて、つつもから仰らないまでは
年はわかい神様ですよ、夜番の節、ちよとききなさいました
けれど、今福の指ろうさんも、まだ、知らないなつて、お蝶小泉さん
しかくして居なさるし、並河さんにきけば、あいまいに濁して居ら
つしやるし、ほんににくらしいよ、しらじらしく、講釈集にも算するお為に
なつて居ながらや、そら、もうじやないよ、かはづかしくつて、きまりがわ
るくて、つまり、いひおくいもんですから。 それはその昔、ごもつともですよ
もう、かうかうことはおよしにして、無事で出来たこ一おめでたう、を
の後に出来たのやらはつあつごりんに入れます。知つてはいけないよ。

若き子がびんのほつれの出たらぬ
君ききますか星ささやき

問ひますかをは君わかし君かへき
今日お日目の札れ銀壺上

何となく来ひのをみつるかな
目の輝業今日からまはし

結業ありてうつさん色に迷ひあり
おきへ了結の良いさまおめず

星一つ西にながるる夢入り
その道よ人のあまぎし

しめやかに調あはせてよろこびの
講まやりなづる新の稲布

處世の歌

出雲八束郡秋鹿村　碧雲生

嗚呼美はしく新なる
朝の光りさし添へぬ
眠りを夢を覺め出でて
我が勤むべき時は来ぬ、　14

塒離るる朝鳥の
猛く雄々しく呼ばふごと
今日の日程を了るべく、
いで前進まん勇ましく、　14

光り限なき天つ日は
語らず言はず聲なきも
血汐は燃えて骨鳴りて
希望は胸に溢れたり、　17/16

勤むるものは天も亦
助け給へりいでやいで
心の駒に鞭打ちて
力の限りいそしまん、　10

世のうき風は吹き荒び
仇し荒浪騒ぐとも

堅忍不屈の精神して
進むになどか躊躇はん、 17

驕慢怠惰落膽の
悪魔は常に襲ふとも
克己不撓の勇氣して
千里の外に掃ひてん、 20

嫉妬罵詈何かせん
真澄の鏡曇りなく
煩惱煩悶何かせん
希望の光夫ゞ輝かば 18

飢えて凍えて縮かむとも
獨立自尊を杖にして
下すな頭従ふに
すがるな人の袖の下、 18

沙の上なる樓閣は
やがて倒れん風なきに
自ら立てし基礎は
揺ぐ時なし永久に、 18

茅の軒端は傾しとも

か黒き妻は醜くも
額の汗に得し麺麭の
尊き價値神も知る、 17

富も權位も威勢も
正義の前に力なし
黄金も珠玉も白銀も
不義の財は土塊ぞ、 20

あはれ人生五十年
力惜みて何かせん
勤むるものに報酬あり
働くものに慰籍あり、 18

奈翁は握る欧州の權 17
始皇は築く万里城
彼の水中の蟲すらも
遂にはつくる珊瑚島、 20

精神一度到りなは 20
如何なる事か成らざらん
見よや軒端の雨垂の
石を貫く例証あり、 18

處世の秋

碧雲生

嗚呼気はしく新たなる
朝の光りさし臨へば
眠りを夢を覚めさせて
我が勤むべき時は来ぬ
騁難る朝馬り
強く繋はしく時ばかりぞ
今日の日程に放し来
いざや進まん勇ましく

光り隈なき大つ日は
語らず言はず黙々と
血汐は燃えて骨鳴りて
希望は胸に溢れたり
勤むるものは大なれ
助け給ひ一ツでやいで
力の限りいそしみて
彼方の岸に達し行けん
世の嵐き風は吹き荒れ
仇し荒浪騒ぐとも

我が望念の燈火は
進むになどか躊躇はん
驕傲怠慢憂慮の
悪魔は常に襲ふとも
我が勤勉の根まで
千里の外に擲たん
姑息逡巡何かせん
惆悵懊悩何かせん
我に遠大の針あり
我に遠謀の矢あり

飢ゑて凍えて斃るとも
独立自尊を旗にして
下す真頭徒らに
おがみなき人の袖の下
砂の上なる楼閣は
やがて崩れん風吹く
自ら立てし基礎は
揺ぐ時なし永久に
業の軒端は松しとも

此の月日は早けれど
倦まず倦まず励みなば
緒には遂げん成功の
其の栄やはた如何許く
やがて日は落ち風死にて
暗の帳の垂るる時
今日の日程を為しをへて
静かに過去を思ふ時、
心は清く気は澄みて
来ん日の幸を祈るべく
夜の御神の懐に
安き熟眠を貪らん。

五十あまり千文字

本庄の娘に一狂女あり年齢拾九、拾七の時一青年と交情を温め爾来
数年琴瑟いよいよ濃かなり。時に家に近く一人と〔?〕するに悩み男子は〔?〕
彼女を棄てて郷を出てゆく先をしらず。彼女待つこと数年香として消息
なし。かれ即ち前狂郎の髪を五分刈とし後狂郎の髪を長く背後に
たれて前は絵さん(男の名)後はわたしと称し人形を背負ひ衣服を飾
妙音を歌をうたひて市中を徘徊し夏青年を見れば即ち追従し
て去らずと云ふ

上

『思ひたいそで君来たいそで
うちの細道七すがり』

九十九夜かけて通ふとも
軒端をわたる夜風の

が黒き婦は醜く
額の汗に得し麺麭の
尊き価値を知る 17

11

富も官位も威勢も
正義の前に力無し
黄金も珠玉も白銀も
不義の財は土塊で 21

12

少にん人生五十年
力惜みて何かせん
勤むるものに報酬あり

働くものに結縁あり 14

13

栄達は捨る全ての権
心意は永く万里城
夜の中より来たるらむ
運にはつくる神秘断 21

14

精神一度到りては
如何なる事か成らざらん
見よや新時の新気象
石を穿てる跡あり 18

やがて日は暮れ見えにて
暗の帳の幕す時
今日の日程を了へて
静かに過去を思ふ時 18
心は清く気は澄みて
来ん日の幸を祈りつつ
夜の御神の懐に
安き熟睡を貪らん 16

[illegible]

安く人の一生
後に事を残すや
[illegible]

[illegible]

●奥村房●

そよの音をも立てず吹くと
かたく誓ひ来我こころ
つれなきものと聞きたる
むかしの夢かいつはりか

母が手梳でし黒髪の
いつしか肩まですぎぬれば
男ごころに酔ひしれて
我からたどる仇しみち

新月はづるはをまゆも
いつしかみどり萌え出づ
まだ世になれぬ処女子の
燃ゆるほのほのひと筋に

池の薄氷とけそめし
春風ぬるく吹くなへに
やがて醒めなん浮世の
いたづら夢と知らずして

岸のやなぎのいと長く
なびき初めたるかひありて
馬にゆきかふ道のべの

色まだうすきつぼすみれ
つぶくめ石に砕かれて
やがて枯るるもしらずして
世の罪とがをただす時

みやまのおくに彰より
沖の小島に猟人となり
かけても見よや力あらば
清くすずしく柔かき

み空に星のきえうせて
野に花咲かずなりぬとも
神のさづけし我意を
さまたぐ験のあるべしや

夜見の巷にありといふ
人食る金をとり出でて
綾羅をかざる殿のうち
ややに消えゆく帳臺の

人の世のあらぶ魔神らが
几帳のとびら仲らめて
くしき香りのにほふ時

まもひにやせし姫君も
情くだれとそゆかしかき
神のきづけし我志を
荒むこゝろのなからめや

※ ※ ※ ※
※ ※ ※ ※

梨の大樹に月おちて
門も大山眠るころ
背戸のほそ道寫きかけ
かすかた響くうたの聲
「恋がたいぞや忍ばせたいぞ
うらの細道ふやぶから」

中

「雨のふる夜も風吹く日にも
二里のくげ路の何つらからう」
年のみとせは夢なれや
うれしき春のめぐりきて
くしきゆかしき新星の
わが世の空に匂ふころ
ゆかしかき根に花咲きて

小島花咲ふ中山清水へ
ゆかしき風の肌にしみて
我なら在くにおぞましや
この世のおもひ知りそめて
今はた人のうらめしく
人やりならぬ苦しみを
母君在らで手触れざる
乳房を他人にゆるしては
君在らなくて誰かまた
あはれとだにもなのるべき
あざうら若き女子が
嘆きこゝろやらせなく
親の許せし妹と背の
返乳の親のふところに
夢やすかりし其上を
柳が枝にさくらさき
梅の二つ尾に桃なるも
おもひ出でゝ咲けよ林檎

天柱くだけ地維さけて
世は逆さまに在りぬとも
我等二人はとこしへに
千代に八千代をちかひしを
何に狂へる家出して
さらに音づれなしとかや
人は鐵にも非らざれば
君は石にも非らざりき
水は流れて花ちりて
地のあやめもうつろへば

世にすてられしうつ蝉の
もぬけの殻を命にて
秋は落ちめの淋しき旅
木枯風さへに音つれて
背戸の梨の樹[illegible]
なぶるか葉のすさまじく
「かはさやすきは男の心
昨日の雨が風となる」
下

「夜寒くる夜は宵からしれる
しめたすこきがそらどける」
「とけたすこきを手に持ちながら
おもひ出しては揺りなきし」
肩にあまれる黒髪を
惜しげもあらずそり落ち
晴れの衣を身にまとひ
白粉つけて紅さして
世にも妙なる姫君の
肌のぬくみにあたゝめし

わたりの袖の今さらに
昔なつかし人形の
芳顔やたに秋せまれて
誰に口つけの媚なるらん
あくがれはつる
ふたの香りのかんばしく
抱いてながめて頬すりて
乳房あたへていたはりて
かいまきかけて背なでて
守唄うたひうたひゆく

喬木に走する蔦か
ゆかしし瀬走りの色紗か
天つ乙女の琴の緒か
くしく妙やしきさとしへ

東へ拓村の辻に立ち
行きた磯辺の波にぬれ

つれなき人をうらみなき
悲しき人を抱き笑ひ
花けつみたき
紙……中の

~~走れなきけになれて~~
~~狂ひをあたらぬ女子かれ~~
~~許されこその村なりや~~
柔かなりし女か肌は
何のまかめに破れ
温かなりし女が血は
何の力にけされし
親のゆつりのそれならで
尊き神のちからにも
くしき医師の力にも

みなかかる世のやまひ
かもおもしてにひとりなきき
紅絹の袖うちかへしては
窓を覗くしら瞳を
やましき風にまかせつつ
かすかに響くうたなり

更けゆく夜に宵からも
しめたしこをかとかける
夕さけたまこころをまに持ちながら

偶感　十二年十月十六日作

碧雲

無名の詩人地に伏して
大北極をしろしめす
全智全能至仁至愛なる
専制聖至皇帝の
千代をはるかに寿き奉る
一億万の[illegible]御かれ
一百万の人[illegible]ずかれ
き[illegible]たから
権威

聖意一たび動きなば
手足の命にしたがふがごと
中央五個五人ごしんも
君の御手にひれ伏して
漢北嶋辺の草木すら
みいづの風に靡くとか
大聖キリストの霊蹟も
大哲釈迦の旧国も
今や他人の手に委して
大儒孔子の故国のみ

操つ

を悼たる

三仁五姦の事[illegible]三帝

一天の主帝を来[illegible]みの夢に

かりにも描きま[illegible]すあらば

四十余年の東亜の旧圏

清朝墳墓の地たる満州

撤兵拒絶の通牒は

あまりに深きおんなさけ

殊に況んや貪利の小国

蕞爾たる高麗半島

北漢山の麓景福宮

燈火細き錦帳のもと

紅涙潸々夜々の雨

慈眼千古の明いかに

碧瑠璃の空にまがへる海の上

朝日を抱ける島帝国

不羈独立ここに三千年

天の御中主の威霊を跡に継ぎ

大日靈[illegible]の慈悲を胸にたたへ

義に勇む日本男児

本庄の郷に一狂女あり妙齢拾九、拾六

の時一青年と交情を温め未来を契

契いよいよ深かなり、時に家に迎へん

とするに悩み男子は継母彼女を棄て

て郷を出て行く所を知らず、彼待つこ

と十数月余として消息なし、これ即ち

前頭部の髪を五分刈とし後頭部の髪を

長く背後にたれて前は[illegible]さん（男の名）

後はわたしと称し人形を背負ひ衣服

をかざり悲音悲歌をうたひて市中を

徘徊し少青年を見れば直ちに追従

してあらずといふ。

上

「居ないぞや、居はせないぞ。

うらの細道、小やぶから。」

九十九夜かけて通ふとも

軒端をわたる小夜風乃

そよとの音をも立てずホッと

かたく誓ひし我こころ
母が手拭で黒髪の
いつしか肩をすぎぬれば
新月はづる陰をまゐる
いつしかみなぞう前を出づつ
池のうすらひ解けそめて
春風ぬるく吹くなべに
岸の柳のいとながく

なびき初めたるかひなさや
つれなきものと聞きたれど
昔は中々かりつはしか
男ごころに誘ひしれて
我からたどる似しみち
まだ世になれぬ乙女子の
燃ゆるほのほのかと届に
やがて醒めなん浴庭の

林のいたづら棄てしらずして
島におきまつく道の邊り
包まぬうすきつぼすみれ
つぶての石に砕かれて
やがて枯るるもしらずして
深山のおくに薪とり
沖の小島に海人となり
み空に星のきえうせて

野に花さかずなりぬとも
常世の国に行きするも
人事を全てとりおきて
人の世の為ふ魔神らが
世界をがをただす時
かけても見よや力あらば
清くすずしくわらかきて
神のさづけし我意道

坊くことのはうべーや
綾羅をかざる殿のうち
やゝに消えゆく帳臺の
み帳のとびらゆらめきて
くしき香りにほふ時
君ひ●にやせし姫君も
情く尊くあたたかき
神のすがたと我為す

うらやむこゝろのなからめや
梨の大樹に月おちて
四大風も呼ぶ小夜中
背戸のはて道暗き影
かすかに響くうたの聲
「君がたいぞや息ばせたいぞ
うらのほそ道小藪から」

緑意紅情原稿

新體詩

春の夜

一月廿八日夜
十時三十分
[illegible]先生
[illegible]

おぼろに匂ふ春の夜の
管絃の音も静まりて
大御殿曲たちつけて
うらたき姿花やかに
み廚子に近き御くの
紅の袖やゆりたまふ

花の宴やはてにけん
つぼねあたりの夜は更けぬ
おもひに沈む姫君の
華ある夢もちらん
色なき紙のうちみれ
ささませて筆のあと

明治四十六年六月十九日作

六月九日投

國音の歌

言靈こそさきはふ國の、名を得てし我

聲韻よ、天地や笑み發けぬる、宜や呂

律おほむね漏れす。

出雲國八束郡秋鹿村大字岡本九十番邸

應募者　奥原潔

※註、第三句、天地の間より自然に發生せるか、第四句、

宜なるかな、呂律概ね漏るるものなし、との意

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜のあとなれし[illegible]に

[illegible]

言霊でさきはふ國の名を得てし我聲
韻よ天や地や笑みひらけぬる 亘 呂律
おほおねもれず。

[illegible]

國音の歌

（六月二日投）

花わ上野にあらしやま、巾ふ風そ
よぐすみだ堤、月も冴えける茅渟
大堰、路面凍れり醉ひ寢ねむ。

應募者　出雲國八束郡秋鹿村　奥原福市

附言

本篇は名所の四季を詠じたるものなり。

春は上野、嵐山の櫻、夏は、隅田川原の夕涼み、秋は、芽渟海、大堰川あたりの月、冬は、道路一面に氷にとざされて、見るかげもなければ、一杯の杜康に暖をとりて、眠を貪らんとの意なり。

凍る、大堰が掛かさなる故一方は割とせり。

秋の落葉を仰ぐがしきなり、山陰の寂しきなさがな
うら淋しきものを、雨さへ打つ音ぞ何て、今年の秋
ばかりし陰鬱なるはなかりき、庭の秋草も物悲しくて、小ばさ
がその露しげく、松虫鈴虫のあはれを語りて夕暮き、
けしたくも寂しき一時のはかなさ、おもひ起さすや、詩友東尾
秋遊君の許なる人々とは、我は舊き君と相見ず、東西
百里を隔てて、殊しく ミューズの神のみ前と参る
輝きし尊し吟星の光に酔ふてもなり、この難に移して

うれい、庭梅の梢にたつきらんや、須磨の浦の松風
長くたえるみの軒にもきこえ、碑の文字いまだに無
性のおもひをよする種ともなさばなさらん。

西方星辰をもしあふぎの座の上に

かすかに有る中よりの影

明治三十七年十月二十日

出雲の國秋鹿の里

碧雲生

課題

梅のおとづれ

出雲國八束郡秋鹿村 碧雲生

何事もおくれ勝なる山里も、こればかりはさき加けの梅の初花、氷姿玉肌の賛辞は止して、次の日曜には、是非友をさそひ給へ、待って居ます。

室咲きのを作もわろくは有りが、花を一つくちのり枝頂き、佛前
梅こそ花の魁、一方の飾にす、室の事にすなるわせし、一方
の中には、せたまらく、性変もなるよ。

懸賞講堂唱歌

師を送る歌（五七調）

情ある　み手にすがりて
朝夕に　したひしみかげ
ああ夢か　今日のみ別れ。
暖かき　みむねによりて
年月に　受けしみをしへ
ああ夢か　今日のみ別れ。
海よりも　深きみなさけ
山よりも　高きみめぐみ

いかでかは忘れはつべき。

△

いざさらば限りのみことと

しみじみと胸にきざみつ

いざさらば幸くましませ。

幸くませ

友垣のみことと

長へに我はわすれじ

いざさらば幸くちよませ。

出雲國八束郡秋鹿村高等小学校內

應募者　真原福市

外歌詞は一節四行全節四節以外

△

しみじみと胸にきざみ付け

御々君の幸行くみ幸

幸くませ　いざさらば

廿四枚

應募者 出雲國八束郡秋鹿村大字岡本九四番邸 奥原潔

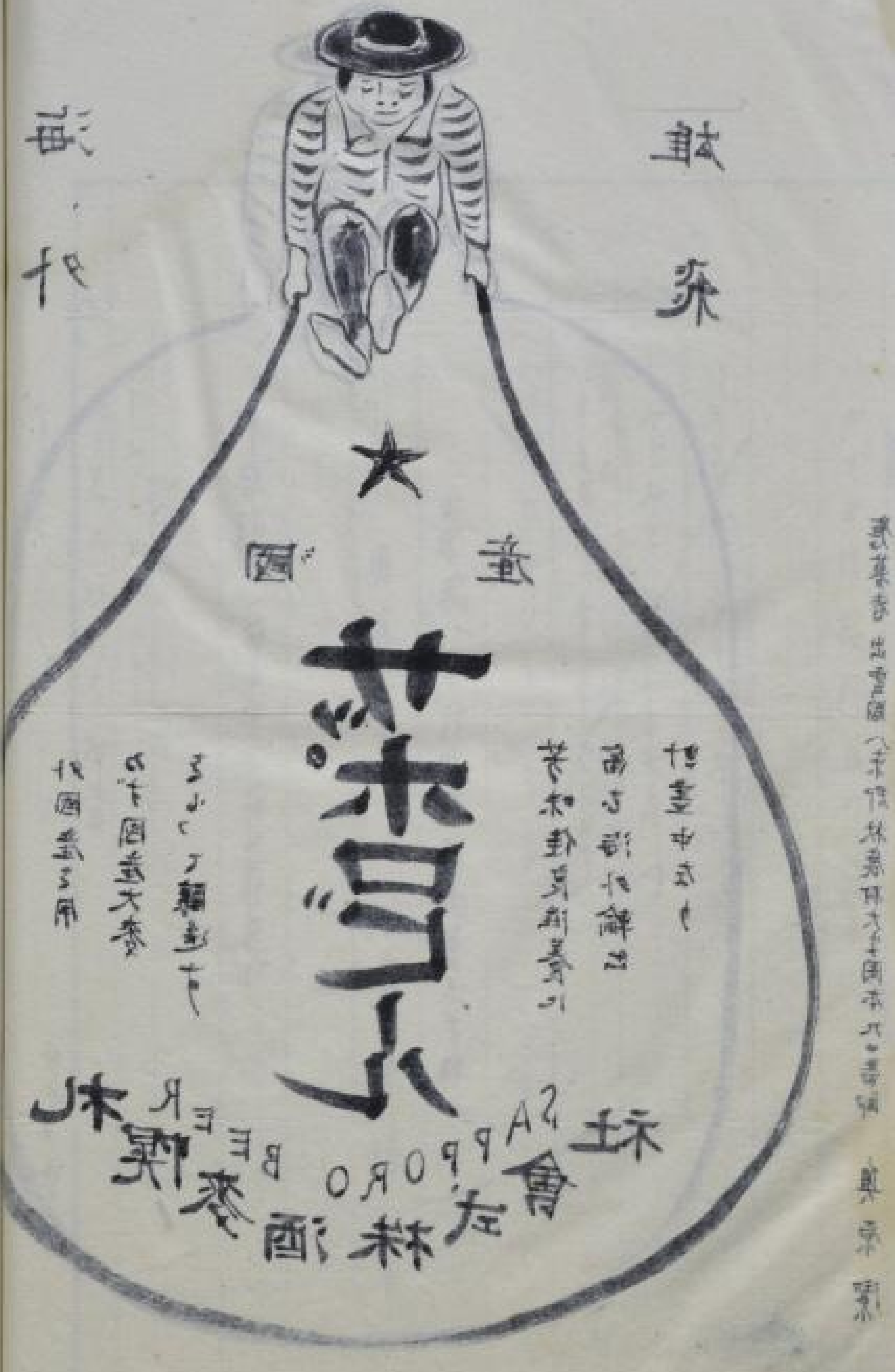
言文一致書簡文懸賞課題

梅のおとづれ

碧雲生

何事もおくれ勝なる山里も、こればかりはさきがけの梅の初花、氷姿玉肌の自賛は止して、つぎの日曜日には、是非入らっしゃい、待って居ます。

（出雲國八束郡秋鹿村　小泉爲市）



懸賞講堂唱歌

師を迎ふる歌

待ちにまちたる師の君は
今日ぞ来ましぬ明日よりは
教への庭のわか草も
緑の色や添はるらん。

慈みの露のしたかげに
おのかむきむき咲きいでて
教への庭のなでしこも
花の香りや添はるらん。

出雲国八束郡秋鹿村高等小学校内

応募者　真原福市

新小説言文一致書簡文懸賞課題

出雲国八束郡秋鹿村　真原燦

紹介状

親友若林英一君法律研究の目的を以て上京一方
に自己の研究をなし一方には判検事弁護士の
食客となり自立して俗業をなさんとの大望を
し相当のところあらば御周旋を願ひます、君は人
本年中学校を卒業
は進取の気象に富み意志強健品行方正なること
を保し小生誓つて保証いたします

同

山陰某[illegible]

然し上京の序には遠乃来訪下さい 拙宅の当てます 同
人には大きな歓迎の有り致す 仕年よりの材料信次
で願ひます。

（奥村版）

言文一致書簡文課題

出雲国八束郡林広村

おふ 生

梅のおとづれ

室咲のそれもわるくはないが、霜をしのいでの自然咲き、便滑稽をたゝ野花の魁、一入の眺めです。谷間の鶯にききがけし、一両日のうちに、是非来たまへ、候ちですよ。

の背も来ては、郵便は、まるで、あの音楽でみちてる。[illegible]五尺や十尺では、あの香りの真味は合うものでない。と、いつになし大丸畑、たんと威張つてやりました。一つあの香をおとろかしてやら[illegible]ないか。

[illegible]
[illegible]
を気づかす。

評語
〈[illegible]〉
同じ題でも[illegible]面白くもせず、[illegible]
[illegible]
[illegible]

冷 露 生

出雲國八束郡秋鹿村
新小説書簡文課題

新小説書簡文課題

蟲ききに誘ふ文

出雲國八束郡秋鹿村　冷 露 生

ひさしく
この頃の暑さ、實に何ともいへないぢやないか、著作とか、調査とか、野暮なやせ我慢は止して、夕景から、嵯峨野あたりへ、虫ききと洒落れてはどうか、今朝も、例の虫売の大女をからかつて見ると、この頃の宵に来ては、野辺は、まるで、虫の音楽でみちて居る、植込の五尺や十尺では虫の音の真味は分るものやないと、いつになく大気焔、なんと露つけながら、一つあの大女をおとろかしてやらうぢやないか。

三十六

本村助役小笠原嘉市君逝殁誄を悼し〇惣
七拳銃を友として四国の間に退隠せる、聞く
君の家世々里胥として村治に関係し君また継
替ちて　　と為り　　と為り用係と為り市町
村制実施の後書記に挙げられ次て名誉職として
助役に就任し爾来村治に鞅掌すること十
数年圓滑慎密まれて屢々紛争を調停し
一団體結せ村治上の紛争間無團結につくと共に
産業高調せしむる今益村治上大に之を悟もとるに
大に君の功績の聞ゆるに感歎せずんば非ざるべき

有幸慮盛者に隠遁して浮世の名利に遠ざかるの
道を笑って曰く我輩は之を悪んで遁るにあらず然
れども世の前に善あらんよりは世の道に睦なきにいづれ
ぞや其の身に未来あらんよりは其の心に善なからんに
いづれぞや、嗚呼人いかに其の跡を去って逍遥自適
高きに登っては遠きを望み茂樹に坐しては自ら息ひ
山の清泉を掬んで自ら飲み野の田園を耕して自ら食ふ
更に縄を舍うなすもなし 即ち合息なる人にや
つて村治に従事する社会に対しての務めに在す
と言ふし 嗚呼其の境遇まだ甚だしきかな。

明治三十七年 五月 二十三日

○奥村販○

新婚を祝ひて

わが紫のいろふかく　泥きをぶきかつまで
よる辺たゆけの若き子ら　玉乃小指のむすびた
笑めるがに若く新なる　霞の光やしつらけん
映えにたへなる唇の　紅わかる膳指の寿

庭にひろがる祝典の
希望の光すかし見て

胸にわき出る歓楽の
艶なる夢に酔うときか

平和の光笑みを見せ
全き秩序に抱かれては

只たのもしき人の姿
運命を今か信ずらし

[illegible]神の室に乗りた
清き光明を掲げつつ

今宵を我の始にて
未来の幸を祈りの念

神武天皇の東征

本論も[illegible]いよいよ紀元二千六百年を迎えることになりましたのは誠に[illegible]であります

[illegible]

一、[illegible]の[illegible]

天孫[illegible]に天[illegible]大和の[illegible]

[illegible]大和地方に[illegible]

[illegible]人民も[illegible]

[illegible]なのです。

[illegible]

[illegible]大阪[illegible]

[illegible]

であります。[illegible]

さつまするのたへ吉田口とて、大山祇神の一族が[illegible]吉田口[illegible]

に[illegible]をおいて[illegible]後来[illegible]村[illegible]

の[illegible]のです。

三千年[illegible]この[illegible]に[illegible]吉田口の[illegible]山祇神の女木花さくや

[illegible]

[illegible]吉田口[illegible]

[illegible]

[illegible]ですから[illegible]吉田[illegible]

[illegible]

二、革命の[illegible]

[illegible]

それから西に転じて河内口の方面で、三輪方面と言う道の要路に当る国の主（長髄彦）に出逢はれたのです [illegible]

[illegible]

毒に当てられ [illegible]

大和地方は [illegible] 天皇 [illegible] 上陸となりました、

[illegible] 天皇は [illegible]

（四）大和の平定

[illegible] 大和に進撃 [illegible]

天皇が熊野に上陸せられますと、熊野の荒ぶる神の毒気に当てられて、皇軍は、皆正気を失はれましたが [illegible]

[illegible] 八咫烏を案内として [illegible]

[illegible]

この吉野川の上流の地域即ち宇陀郡に [illegible]

はに至って八十梟帥の住地でございます。宇陀の地には兄猾弟猾と云ふ兄弟が勢力を張って

をりました。兄猾は途中で天皇の軍を待ち伏せ[illegible]八咫烏をやってこれを招きましたが兄猾は参りません。弟猾は

参りました。兄猾は陣営に[illegible]を造り、却って天皇を謀殺しようとたくらんで居りました。

弟猾が其の事を天皇に申し上げましたので、道臣命が兄猾を[illegible]して其の[illegible]を[illegible]

を[illegible]し、[illegible]の天皇を[illegible]と[illegible]の陣営を[illegible]ました。[illegible]

進んで天皇が来られたので兄猾を責め問ひて[illegible]一[illegible]なさいました。

天皇は[illegible]宇陀の高倉山にお登りになって国中の

ありさまを御覧になりますと、国見丘には八十梟帥が女坂男坂の

あたりに軍兵を集めてゐるのであります。大和の[illegible]

仲をとりのへて[illegible]をなさって[illegible]。椎根津彦は[illegible]

そうして[illegible]

八咫烏を遣はして兄磯城を召されましたが[illegible]

兵力を持って[illegible]

[illegible]

次々の賊軍も大抵ほろびましたが、ただ長髄彦をうちとって五瀬命の仇を報いなければなりません。

皇軍は[illegible]を[illegible]して[illegible]と[illegible]の[illegible]を[illegible]と[illegible]

[illegible]の[illegible]は[illegible]に[illegible]て[illegible]

[illegible]は[illegible]を[illegible]けれども[illegible]

[illegible]て[illegible]て[illegible]ことが[illegible]

其の時[illegible]の[illegible]は[illegible]を作って[illegible]

りましたに、ここに不思議なことがございました。[illegible]

[illegible]、金色の鵄が飛んで来て天皇の御弓の

のはずにとまりました。その光がきらきらと輝いて[illegible]

[illegible]長髄彦の兵[illegible]

賊軍は之に驚き[illegible]

[illegible]長髄彦は大[illegible]

はとう[illegible]饒速日命の[illegible]を[illegible]て降参[illegible]

[illegible]

はじめ中大和郷とす[illegible]てある郷に[illegible]

[illegible]千本[illegible]りして丁丈に[illegible]

[illegible]のはこれです

[illegible]

[illegible]の[illegible]

は[illegible]

[illegible]の中[illegible]住んで[illegible]陸中[illegible]の[illegible]

[illegible]この[illegible]

[illegible]万世[illegible]の[illegible]

[illegible]に[illegible]

一、[illegible]

イ、[illegible]

ロ、[illegible]

ハ、[illegible]

ニ、[illegible]

ホ、[illegible]

二、[illegible]

[illegible]

[illegible]は[illegible]を一まとめにして[illegible]

[illegible]が[illegible]を一度に[illegible]

[illegible]

[illegible]

花は、花が咲く [illegible]

[illegible]咲く[illegible]

又 花が咲くを [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(SAKA) (SAKI) (SAKU) (SAKE)

[illegible]

咲 カ キ ク ケ

咲か 咲き 咲く 咲け 咲け

[illegible]活用[illegible]上一段 下一段 上二段 下二段

[illegible]

三、四段活用の二種[illegible]

四段活用

(咲) カ キ ク ケ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二、一段活用

一段活用と上二段活用と下二段活用との三種に分ける

上二段活用 (起) キ キル キレ

下二段活用

コノ二つを本にして[illegible] 五十三頁から五十七頁ノ表参照

文語の四段活用は口語と同様で四段に活用し、文語の上二段活用と下二段活用とは上一

十数日も不太しけをくらって、明神丸は今日も赤濱港の沖合に[illegible]して居る、一団[illegible]

ら流れらうとおもって居るのか十日過ぎても二三日[illegible]ても未だ赤濱港のしけ流され[illegible]

は毎日毎日赤濱を眺めつつ酒[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五

あるひは[illegible]、又は[illegible]の[illegible]は三の[illegible]きっての[illegible]、[illegible]

[illegible]の[illegible]からおつうして大三郎の[illegible]、大三郎の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]といは[illegible]、[illegible]は三つに[illegible]に[illegible]

[illegible]の[illegible]、[illegible]は[illegible]、大[illegible]に[illegible]して

一[illegible]の[illegible]く、[illegible]

[illegible]の[illegible]、[illegible]の一[illegible]

[illegible]に[illegible]の[illegible]は[illegible]

[illegible]、人[illegible]は[illegible]を[illegible]、[illegible]

[illegible]一[illegible]を[illegible]、[illegible]を[illegible]して[illegible]の[illegible]を

[illegible]して[illegible]、[illegible]男一[illegible]、この[illegible]の[illegible]

[illegible]、[illegible]女の一[illegible]は[illegible]を[illegible]、[illegible]

[illegible]に[illegible]

[illegible]、[illegible]の[illegible]

[illegible]、[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よく使ってよかあってくるしい。
千寿士竹は旦那んに嘘を泣って去かした。[illegible]の下には[illegible]に嫁いだ。旦那の
好きな花をけしならかと。
[illegible]
直ぐ来ますまで[illegible]かあきまする。[illegible]の[illegible]した。
帰へ帰りましたと[illegible]旦那んが[illegible]へ[illegible]した

西月の寿例

[illegible]が[illegible]の[illegible]は[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]は[illegible]ってしまった[illegible]の[illegible]は[illegible]
[illegible]ということ[illegible]の[illegible]を[illegible]は[illegible]
[illegible]はまったく[illegible]
[illegible]の一[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の寿例を[illegible]ます。
[illegible]

一、係つき

[illegible]の[illegible]に[illegible]と[illegible]で[illegible]と係
[illegible]の[illegible]のです。[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]を[illegible]て[illegible]の一[illegible]
[illegible]は[illegible]て[illegible]を[illegible]ものであろう[illegible]
[illegible]

二、大晦日

[illegible]の[illegible]です。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
三すや本とて

松の大門（門松）三本づゝ立てたものである。家の口をやらく[illegible]もしくは松を立てる。もろもき
国入
[illegible]つり[illegible]をつけたものを正月に迎へた[illegible]一年中の[illegible]を迎へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
元旦　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
年頭の祝儀[illegible]
[illegible]
[illegible]
（奥村版）

[illegible]
[illegible]
三ヶ日　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
羽黒　寺院の[illegible]
[illegible]
[illegible]
国入
[illegible]
[illegible]
[illegible]
八日　節下し
[illegible]
[illegible]
国入
七日の夜には七草を[illegible]

米、大根、カブ、ネギ、
芹、茗荷、柿、栗、

と、大根、芋、芹、[illegible]あるいは二つの土作を[illegible]て中おいて左へ、振子を
なぞってうちたたきつ「大麦の島からやって来た[illegible]お作をあへて十アホイホイ[illegible]」と
半時ほどで唄へあげる

八日節下

お山下し

十日の夜はお山の神様をおろすのである。二本を二本にして門松の心（門松に二日目おろす）
田畑に出す[illegible]を出して立ておく。玄関あたりに来る。又は枝を水肥を[illegible]つてこれを
田畑に拝し、新たなる年を祈る。一畝にチョロ二畝にチョロ三畝と[illegible]を打鍬
すと唱のやみをやりつつ田圃の方へあちらこちらに行ってゐる

心木迎　個入

十二日に心木迎がある。[illegible]一力があってあちこちに[illegible]して飯をつくることになって
て居る。[illegible]心木迎をして心木とは大きなの木を[illegible]てきて[illegible]
をかりゆくにつれ大板がくこ[illegible]の[illegible]して[illegible]てある。十日の左一束ずつ[illegible]
すでは[illegible]年用の大床、大釜[illegible]消[illegible]のである（[illegible]用の[illegible]とする

（奥村版）

山の[illegible]の[illegible]てくれますものである

正月に[illegible]三ヶ日に[illegible]を使って[illegible]、道中の[illegible]をする[illegible]

合ふ　太鼓つぶし

はやきん大晦二十日、[illegible]に大きな[illegible]の[illegible]太鼓を[illegible]のである。[illegible]は
近の太鼓に一尺五寸の小鼓をつけ、テレテコテレテコテンテンテン、と[illegible]を[illegible]に[illegible]
出てくるのである。トレトレトレトレトレトレ[illegible]
陽気に[illegible]て[illegible]来る

夜廻り

十二月の夜に夜廻りが[illegible]一日[illegible]して[illegible]を[illegible]大[illegible]
[illegible]大はやしで[illegible]を一所一所廻って[illegible]をのむのである。中には
[illegible]に[illegible]す

左義長

お年[illegible]八日[illegible]神木を[illegible]の[illegible]太郎を[illegible]して[illegible]女の[illegible]
[illegible]を[illegible]してあって[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]して[illegible]を[illegible]
[illegible]太[illegible]出来[illegible]の[illegible]
[illegible]のである
「[illegible]」[illegible]
[illegible]

個入

栗ほやし

[illegible]

3

(奥村版)

出雲地方のお正月

社會が開けるに從ひ、旧来の風俗習慣は、日に月にすたれ去りて、昔のありさまは見る影もない様になってしまふのである。都會の地では、はや、数十年以前のおもかげは全くうせて居るが、山間の僻邑などでは、まだ多少そのおもかげが残って居る。しかし、これとても、捨年の後には、恐らくは全くかはってしまふであらう。故に古俗保存といふ訳でもないが、他日風俗史料の一端ともならうかと、社會欄へ投稿することにしたのである。處は八雲立つ出雲の國、八束水臣津野命が栲衾新羅の國から引

き寄せなさつたといふ、八束郡あたりの、陰暦正月の嘉例を紹介することにしたのです。

菊の舍主人

一、餅つき

陰暦十二月廿七八日の頃になると、田舎ではあちらでも、こちらでも、ポンポンポンと餅つきの音が聞こえる、一年かけて艱難辛苦の結果、やうやく収穫をうつて、農家一ヶ年中の安息日なるお正月の準備に忙しいのである、どんなささやかな生活をするものでも、町家とちがつて餅の一臼位つかないものは殆んどないといつて宜しい、師走には七五三縄をはり、諸向(裏白のこと)や榊

(奥村版)

の葉、又は、柏葉をさしはさんである、何れも、めでたい縁起を祝つたのであらう、餅つきは、勿論、手がへし、も、囃子がする餘興である。

○大晦日の懸取

忙がはしい歳末も、もう今日一日である、懸取帳に矢立、布財布を首にひつかけて、東奔西走、足を速木にしてかけ廻るのは、いふまでもなく、後半季の取引の仕末を、今日中につけ様とするのである。

○松飾

午後になると、家々の門には松飾をする、高さ五六尺から一丈位の、雌雄の若松を門の両側に植

ゑ、しめ縄をはるもあれば、若竹を添へるのもあ
る、みさや木とて、松の大割（薪）三片づゝ、その根
本にそへて飾るのである、家の口々や室内にし
あき方を除くの外、しめ縄をはる、諸向柿拍葉を
と何の如しである、

○除夜

日がくれると風呂が立つ、一年中のあかを洗ひ
おとして體も心もすがすがしく、夕げの膳に向ふ
のである、宵には麦飯に香の物であつた御膳も、今
宵は四つ物がそろつて居る、鮭の塩引とはいか
ないでも、塩鰤の一片位は添つて居る、五合徳利
も添うて居る、和氣靄然たるうちに夕餉がすむ。
それから、お山をかざる、お山とは、歳徳神の神籬

心木焼がすむと、若者どもは、味噌こし（小竹籠）
に銭さし（銭をつなぐもの）一本づゝ入れて、家々
の椽先へさし出し、ホトホトホトホトと異様の声を
発するのである、家族のものは、その銭さしをと
つて代りに餅を入れおくのである、暫らくする
と若者は餅をとりに来る、待ち設けた家族のも
のは、物蔭から手桶を以て、冷水を頭上から浴せ
かけるのである、若者らも、かねて用意して蓑をか
ぶつて来るのである。

○林、祝宴会

この夜から、または、翌十五日、あらためて当番宿
に集会して、終日終夜、飲めや歌への大騒ぎで居

按の大乱痴戯をやらかすのである。
これがすむと、一年中の安息日たる正月の楽
しみも、一通りをはるのである。
[illegible]
（陰暦一月五日夜記）

酒は旧暦三日頃まで[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○日奈

[illegible]
[illegible]
[illegible]

吉書始

天筆和合楽
地福圓満楽
家内安全楽
諸願成就楽

新玉の年の始に筆とり
諸の宝我も書きとる
癸卯元旦　何某
歳徳神様

○、廻礼

元日の静寂に引きかへて二日は俄かに賑はし
くなる。今日は年始日（祝賀廻礼の日）である、村

人は三々五々おな人どの羽織（現今は若年者は黒の紋付）に紺足袋高木履といふ出立で扇子を帯に挿み、祠官僧侶村吏員名主などの家々を廻禮するのである。各家ではまづ三方をいただかせられる。三方には餅橙子などを中軸とし穀米を撒布し昆布鶏栗干柿神馬藻などとりそへてあるをれから祝酒が出る。有には数の子煮豆が必ずそうて居る。子孫蕃殖（健康で）するといふ縁起である。一杯一杯また一杯五軒十軒と廻禮する中酔歩蹣跚として一枚肴板に泥を塗る連中も多いのである。しかし近年は陽暦一月一日に新年賀會といふものが行はれて廻禮者がやや衰へ

（奥村版）

△たびの木又は榛木を用ひる家もある。

夕飾がすむと、お山をかざる。お山とは歳徳神の神籬めいたものである。神床に榊の枝をひもろ木として、諸向などとりそへて飾るのである。△大幡の昆布、神馬藻、（一名ほんだはら）かけ大根、かけ蕪菁、かけ牛蒡、かけ鯛、串柿、餅花（餅の小粒を藁につけたもの）など、種々の供物をする。これらは、みな、来年の五穀豊饒を祈るからである。

これらの儀式がすむと、大抵の家では蕎麦切を食べるので、寿命をのべるといふ縁起である。

二、元旦

若水、雑煮、つまみ、縫初、書初、

鶏鳴捷を報ずるや否や、主人はおき出でて、産土神へ恵方詣をするのである。途中で知人にあふと

も一切無言で、致禮などしないのである、かへる
と若木を迎へる、顔を洗ふ、歳德神を礼拝する、朝
餉はいふまでもなく雑煮餅で、どんな家でもこ
れのないのはない、朝餉がすむと、家族は一同に
外出をしないで、中は戸をしめて、（たはらを）つちといつて
静かに休眠するのである。
昨日まで雑閙を極めた有様も、一陽来復しては、
恰も別天地の観がある、午後になると、かねて貯
へておいた嘉穀を調製して歳德神に供へる、
婦女子は縫初といつて色紙の袋を縫ひ男子は
書始をするのである、今頃は適宜に詩歌などを
書くけれど数年前までは大概次の様であつた、

（奥村版）

○長慶天皇に就て、六月廿八日の本紙に長慶天皇と大和[illegible]
と題して歴史家の説によれば大和[illegible]の[illegible]
あるにして（[illegible]）長慶天皇を[illegible]するは[illegible]
本年史學[illegible]掲載（[illegible]）せ
れたり[illegible]
[illegible]
[illegible]の歴史[illegible]
が批評[illegible]
[illegible]長慶天皇[illegible]
[illegible]
[illegible]歴史[illegible]
[illegible]

ところ研究は非行[illegible]部の批判大坂意見例すにこれを引

其後各氏の進歩大なり

一、前集序

二、補遺解題（十二ケの元本と[illegible]代の竜に[illegible]）

に於て

一、本研究終了

一、元首三冊記　一、全研究書記了

四、幸朝史風俗遺緒、五十年七年書　六、[illegible]書

一、右かたる史料を以て[illegible]の記録を多数あるに[illegible]

史語[illegible]方に[illegible]へ[illegible]せん

子[illegible]の史料を[illegible]に[illegible]工に[illegible]

の長屋王[illegible]を[illegible]

を[illegible]は[illegible]の[illegible]に

一、[illegible]長屋王書

二、大宰[illegible]日記目録

寺を[illegible]て長屋王邸の存在は[illegible]として白壺の[illegible]の

五千を[illegible]人[illegible]史[illegible]の[illegible]は[illegible]

[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]（[illegible]）[illegible]九十[illegible]

[illegible]の[illegible]（[illegible]長屋

帝[illegible]）に[illegible]に[illegible]

の[illegible]は[illegible]

大の[illegible]長屋王邸の[illegible]を[illegible]方

[illegible]（[illegible]）但し[illegible]研究の[illegible]は[illegible]へ

（二十一丁　[illegible]）

野碌原稿

苗取唄

一 みのに笠きせて、まいらばまいられ、根の宮へ、四笹の露をば雨まさる。

一 五月堂の庭に、小霞の小笠を、かたむけて、ふきかたむけて、ふけども鳴らぬは住て紀事。

一 篠の竹のたるんだ、実のなるとてたるんだ。

一 大仙山の桜は、弥生に花の咲いてく。

一 背戸に咲きるかきえ、今日刈るか明日刈るか。

一 大工むきにとうても、なんの唐焚いた揺る笠。

一 流川の瀬の音、さんざとざんく瀬の音

○奥付欄○

一ふうねの様に腰かがめて、髪結ふりまとまつてゐな。

一千石荷舟の萬代、何がかとうみてか

一娘をうたへるの、くわえや染めて、うたへるかしらぬの、

大蛇杉につり上げて、大蛇杉につり上げて、うたへるの

うそらぬの、すゝんと泣いても、うたへまいって云ひ

まい然く。

田植唄

一朝戸の小鳥、霞みたよぼぬれ、うらし鳴て立つ、

霞にたよぼぬれ。

一道のはたの竹の子、人によい娘、惜えて惜まれぬ、

人のよい娘の。

一唐きの出来る頃さな、何を汁に、磯はたの荒布よえ、

あれを汁に。

一居眉持ちは唐る頃さな、かすのかすびら、ぶらやさらりと、

かすのかたびら。

一ひるまを待つて足、沖の早船、ほはたち押し立て、風を

まつ様に。

一ひるまの上てん、濃み濃み浦、すみ浦の見え亦、咲も

やさらし。

一ひるまの出かきに、笠を忘れて、笠た亦よい笠、はた

の松もたん。

一ひるまの崎にて、笠をかい並べ、ならべつかい並べつ、

畳をかい並べ
一 弟はさうは土手さうな、弟はさ居はえやれ、白いはに
黒いはと、弟はさ居はえやれ。
一 侍の中の間に、はたをまはい、万力かけても、
はたをまはい。
一 大山坂本、すうや宮から、裄の小袖をば、喰や
寝むかろ。
一 むすめ居浜るまうた、椿をかけますよ、椿椿て
ほんどちえく、今の椿をかけますよ。
一 むすめ居のむすめ衆の、馬えどまにつないだ、さねまで
元居城え、下り藤につないだ。

一 今日の雨の雨なき達、お銭持えや、洗の川で洗ひ
おみをまいらえまし。
一 苗代絶ええ、子持菜ぢやえ、小屋の小細道に
よくに植てぢやえやまし。

佐々木達の百達及び余り言葉のいやえさし所に一任して許
正して成た——

今に池見えの千ちで川中をかける……なまるか

七月十五日
画富吴

志内くえん会生中——